366.9
Te77
2ウ

0036145000

0036145-000

３６６．９－Ｔｅ７７－２ウ

勤労と文化

暉峻義等・著

科学主義工業社

昭和１６

AGF

249 紙

366.9
TE77
2

勤勞と文化

暉峻義等著

科學主義工業社刊

帝國圖書館藏

905
278

序

〝志に先んずるものなし〟と古人は云つたのである。志が立たなくては、そして發憤することなくしては、旺んなる勤勞の意欲は起らないのである。

道に志し、道にいたることにつとめた孔子は、この志を最も大切にした人である。〝發憤して食を忘れ、樂しんで以つて憂を忘る。老の將にいたらんとすることを知らず〟と論語のなかに述べてゐるのである。今、私は、この孔子の人生觀のなかに、勤勞する人々の生活のうちに啓けゆく心境と、人生の展望とを偲ぶことが出來るのである。即ちこの一句の味ひこそ、凡ての勤勞する人々の究極の人生觀であり、またその勤勞觀であると

思ふ。

私は本書のなかに、この志をとげるために、自らの内なるものと闘ひ、また外からのあらゆる困難を克服しつつ、發憤以つて勤勞し、その業にいそしむ人々の、生活の様相をゑがきつつ、他方、その志を培ひ、その志を鼓舞し、それを強め、伸ばすことの必要なる所以と、その實踐とについての私の見解を述べたのである。

身をたてるのも、家を興すのも、國家の興隆に參與するのも、そして最後には、新たなる、一層に高き文化を創造し、よつて以つて皇基を宇内に宣揚するのも、あげて勤勞する心と、勤勞の生活とにかかつてゐることについて、今、正しく、認識を新たにしようとしてゐるのである。私は勤勞するわが友、わが同胞の誰もが、みな、この急迫を告げつつある時局の下に、そして世界的動亂のただ中に、勤勞によつてその志をとげ、その人生を向上し、以つて彬々たる文質に到り、禮節に到ることを念願して已まないのである。

生産力昂揚の國家的要請に應へる國民の實踐は、ここに極めて強力に發足し得るのである。また東亞の諸民族の生活に、新たなる秩序と幸惠とをもたらす原動力としての、わが國民の戰時生活體制の確立も亦、ここにその滾々たる源泉をもつものであると思ふ。

昭和十六年中秋

心空書房にて　著者

勤勞と文化

目次

序

國民的發奮……　……　……　……　三頁

勞務者住宅について……　……　……　一七頁

一、文化發揚の政治的方策としての住宅對策、二、住宅不足の根本原因、三、勞務者住宅建設は鄉土の建設である、四、勞務者住宅の建築規格、五、新鄉土としての聚落の社會的施設、六、よき住み方の創造、七、結語

疲勞と休息……　……　……　四五頁
一、疲勞した人に起る狀態、二、疲れと睡眠、三、勞務者にはよき、十分なる眠りの必要なる理由、
勞働と娯樂……　……　……　八〇頁
一、生活に於ける樂しみの問題、二、勞働のなかの樂しみ、三、近代的勞働の本質、四、現代工業技術の科學的精度と倫理性、五、外から與へられる娯樂、六、勞働と音樂、七、最高の國民的文化を與へよ、八、娯樂の創造、
女子勞務者の生活……　……　……　一一五頁
一、婦人と勞働、二、婦人勞働の特性、三、婦人勞務者の現狀、四、生活陶冶の對象としての婦人勞務者、五、婦人勞務者はいかに生活してゐるか、六、結語、
婦人勞働の展望……　……　……　一三七頁
婦人の坑內勞働……　……　……　一六〇頁
戰時の沖仲仕……　……　……　一七八頁
勤勞と文化……　……　……　二〇〇頁
一、勤勞人生觀の確立、二、勤勞による自己啓發並びに文化向上、三、生活の實踐、四、生產機械と人生、五、生產組織の整備確立、
戰時生活體制の根本動力としての勤勞……　二四六頁
一、志、二、國民の最高の榮譽、三、國運を開拓する動力、
農業勞働力と工業勞働力……　……　二六三頁
一、農業勞働力、二、工業勞働力、
勞務對策の文化的意義……　……　二七九頁
一、二群の青年人口、二、高度國防國家建設と勞務對策、三、勤勞層の文化啓發、四、勞務對策に於ける倫理的貧困、五、興亞勞務對策の理念、

勤労と文化

國民的發奮

日本の運命を新たに開拓し、以つて東亞に新たなる秩序をもたらし、日本の文化を一層に高め、かつ宇内にこれを宣揚する仕事は、一人の政治家、一人の勇將のよく爲し能うところではない。かくの如き民族の歴史上の大飛躍は、名將の下に、或は偉大なる政治家の背後に、常にその國民全部の發奮があることを忘れてはならない。われらはこれを日本の運命を賭した日清、日露の戰に觀たのである。今日の時局も正しく然りだと思ふ。この發奮こそ、全國民の生活と國民の文化をして、更に一段と飛躍せしめ、嘗つて國民が志して而も爲し得なかつたところを、よく達成せしめ得る力なのである。

發奮とはそも〳〵何であるか。人間の知性が啓かれ、これによつて人間が新たなる自己を見出し、新たなるそして一層に大なる世界を發見して、心に勇躍を禁じ得ざる人の姿である。彼は正しく光を見、光の中にある。彼はこの知性によつて現し出された光に導かれて進むのである。暗がりの中を拔け出して、光の中に歩み出した、新鮮潑剌たる、意氣旺んなる實踐者、それが發奮の人なのである。

發奮する人は眞知を體得し、その光芒の中に、人間の大行を行ずる人である。凡そ大事をなし遂げるためには、眞知と大行とを必要とするのである。その眞知と大行とによる人間の生活活動こそ、人間の德性を高め、これを深める所以である。こゝにこそ文化の向上の根本動力がある。卽ちこれに基づいて人の文が顯れ、人の質が揚る。文質彬々として具はると云ふのはこのことである。今、

東亞の新秩序建設と云ふ吾々の目標に於て、吾々の求めて居るのは、國民の生活に於ける彬々たる文と質とではないか。吾々は、それを先づ、わが日本の國民生活に確立し、次いでそれを東亞の諸國民に求めてゐるのだと思ふ。

文質彬々たる國民生活の建設に至る道は、勤勞を他にしてはないのである。科學者の道も、廣い意味に於ける勤勞の生活である。勤勞を以て、知性の究極に至らんとする念願の實踐こそ、科學するものゝ道である。この願をもち、この道を歩みつゞけることが、科學を習ひ修める生活であることは、私の科學生活の、實踐からの歸結である。科學研究者の生活の根本は勤めはげむこと、勤勞である。藝術の道も技術の道も、農業、工業、商業その他わが同胞が從事してゐるあらゆる業務に於ても、究極するところは、その業務に於て勤勞することによつて、知に到り、德性をきづき、その人の質を高め、以てその活動力を思

ふ存分發揮するにあると思ふ。即ち努めはげむ以外、國民の進むべき道、時局打開の方法はないのである。從つて勤勞こそ人の知性を啓發し、人の德を高める唯一つの、最も普遍的な、國民の全部に共通する生活の典據なのである。わが國民が、その生活に於て彬々たる文質をかち得る途は、ひたすら勤勞にある。勤勞、以て身を立て家を興し、また勤勞によつて、人はその文をあらはし、その質を高める。文質彬々と云ふ生活の理想は、勤勞によつて國民の全部にかち得られる。全國民に於ける勤勞意志の高揚と、そのたゆみなき實踐こそ、我が國民をして飛躍せしめる動力なのである。

日本の農村には、文質ともに兼ね備つてゐる精農家がある。彼等の農業經營は、科學の指導の下によく伸び、科學的技術に培はれて、時局下の資材と勞力の不足を努力によつてよく克服し、新たなる構想と技術とによつて、思ふ存分に

飛躍せんとしてゐる。その農業技術は堅實にして、その經營內容は極めて豐かである。彼等の生活は都市の住民に比して、遙かに安定して居る。これらの精農家は土地と風土とが異るに從つて、性格的にはみな違つて居るが、どの精農家にも共通した一種の風格がある。彼等の生活態度は、誠に自然である。また物事に對して極めて屈託がなく、大地からぬけ出して來たと云ふ感じのする、親しみ深い風格のもち主でもある。長年の間の勤勞生活によくたへ、よく鬪つて、隨分苦勞をして來て居ながらも、それがそつくりそのまゝ、育て稔らせると云ふ土の樂しみの中に溶け込んで了つてゐると云ふ朗かさをも一面に持つてゐるのである。事物に對する判斷が極めて正しく、且つ自然で、無理がない。その日常生活や農業の仕事も亦、誠に手堅く、適期、適確、順調で、年中とゞこほるところがない。また義に厚く、奉公の念の深いことも、精農家に一樣に見られる性格の一つである。

私は農村でこれらの尊敬すべき人々にまのあたりに接し、わが日本はこの人によつて支へられ、この人によつて日本はその眞の命脈を確保して行くのだと思つたことである。

家庭を訪ねると、家の中がよく整頓して、清掃されて居る。神棚、佛壇、床の間は勿論のこと、臺所、農具舍、穀舍、畜舍等の隅々に至るまで、よく心がくばられ、手が行きとどいてゐる。主婦、子供、老人達の動作や話の間にも、得も云はれないなごやかさが感ぜられ、みんなが心を一つにして生活し、働いてゐる樣子に胸をうたれることがある。

彼等の農業經營は、堅實であるが、極めて積極性を帶び、進歩的である。それは彼等の農業に科學とその技術とがしつくり溶け込んで、而もそれが日々發展を遂げてゐるからである。彼等は本當の意味での科學の實踐者、技術の創造者であるとともに、また最もよき批判者でもある。また彼等の經濟生活にはこ

の時局下に於ても些かのインフレーションの氣配がない。じつくりと、その營つての健全性を確保してゐる。日常生活には、極めて自然な規律と禮節とがある。彼等の規律は軍隊のそれの如く、四角ばつたものではなく、大自然の中に於ける彼等の勞働と生活との自然さ、秩序正しさ、順序のよさとして了解される。また彼等の生活に於ける禮節は、決して近づき難く、親しみ難く、また堅苦しいものではない。天に從ひ、自然に順應し、勤勞以つて業をいとなむことによつて、天の惠と、土の力と、そして人間の勤勞のねうちとをつぶさに體得し得た人の、つつしみ深い生活の態度として了解される。

文質彬々たる生活とは、かかる生活を云ふのではなからうか。發奮して勤勞する人とはかくの如き人を云ふのではないであらうか。またかくの如き農民こそ、國民食糧の增產を孜々として遂行し、以つて國民生活に安定感を附與する

實力をもつてゐる人と云ふべきではないか。また彼等には政府當局が聲を大にして叫びつゞけてゐる生活に於ける消費の規正は、その日常生活の中にとつくの昔から確立せられ、彼等はその生活の實踐に於て、近隣と部落民とに、率先、その範を示してゐるのである。

國家當面の重大問題たる食糧增産計畫の完遂には、未開墾地の開發、休閑地の利用、肥料の配給、農業勞働の機械化、動力化等も勿論必要な手段ではある。併しこれら凡ての食糧增産を可能ならしめる物的條件は、人に志を與さしめ、人の發奮を促し、人の勤勞のねうちを高め、以つてその生活に文を與へ、その質を向上する力をもたねばならぬ。即ちわが邦土に存在する多くの貧農と墮農とが、志をもつ農民となり、勤勞以つて業に服し、業に於てたのしむ勤農となり、富める良農とならなくては、食糧の增産は不可能なのである。從つて食糧增産計畫は單なる物動計畫であつてはならないのである。農業を振作するための科

學と技術とは單に農業生産のためのそれであつてはならないのである。文質彬々たる、文字通りこの意味に於て、宇内に冠たる農民を作り上げ、農業的勤勞のねうちを思ふ存分發揚することが食糧增産と農業政策の最も確實なる手段であつて、國家百年の大計はここに確固たる基礎を得るのである。

眼を轉じて、時局下のわが工業生産力の現狀に一瞥を向けよう。事變以來、わが産業資本は飛躍的に增大した。我が工業生産力は、あらゆる困難を克服して、嘗つての外國依存を着々に打破し、その生産に必要なる資源と機械と技術との獨立性の確保に邁進しつつある。日滿支を打つて一丸とする物動計畫の遂行は、戰時産業政策の實現を、その核心とするものであると理解されてゐるのである。併しながらこの强大なる産業資本の活用をして違算なかしめるものは何か、又漸次整備じつゝある生産機械の全能力を、完全に發揮せしめる根本の

ものは何か。又新たなる生産技術を存分に使ひこなして、わが生産力に飛躍を與へるものは何であるか、それは一つに産業前線に於ける國民の勤勞の質如何にかゝつてゐるのである。卽ち資本と機械とを縱横無盡に驅使し、資本と機械との能力とを、餘すところなく發揮せしめる根本の要件こそ、實に職場にある人々の勤勞なのである。

時局下産業に於ける我が科學者技術者の最大の關心事となつてゐる、生産技術水準を高めるの手段は、我が産業に於ける、技術の物的要件の整備、充實と云ふ事にも勿論かゝつてはゐるが、それは決して根本的なものではない。技術水準の向上は、根本的には、人生の向上の問題である。技術を習ひ、技術に熟達する事は、人智が啓かれ、其の活動の質と量とが一段と高まり、その能力がよく國家目的に發揮せられ、これに基づいて、彼等に生活の安定が樹立せられねばならぬ。

勞働は人格活動であると私は常に云つてゐるが、生産力の擴充を目標とし、高度國防國家の建設を目的とする産業前線の勞務者の技術水準の向上は、その根本精神に於ては、勞務者の人生の向上によつて達成せられることを意味するのである。人生の向上に基かない生産力の擴充は、浮雲の如きものである。勤勞せんとする志氣の振作を土臺としない生活の安定は、國力發展を阻止するの危險がある。

時局下に産業前線に進出した、多くの婦人勞務者に眼を放つてみよ。彼等日本女性は、尙依然として、補助的勞働力としての任務と自覺しかもたないではないか、彼女等のやつてゐる仕事は、高度國防國家建設の事業の最前線の重大任務である。それにもかかはらず、彼女等の勤勞の價値は低く、彼女等の勤勞の質は尙大いに低劣である。彼女等は未だ何等の文化的教養を眞劍に與へられ

てゐないではないか、彼等の有する國家的任務と、それに對する婦人自らの自覺とは、遺憾ながら尙十分に行き亙つて居らず、徹底を缺いてゐるのである。

全體として云ふならば、わが產業前線の勞務においては、未だその文と質とが甚だ備はつてゐないのである。文と質とが伴つてゐないから、インフレーション的雰圍氣がともすれば前線の勞務を襲ひ、生活の不健康が世間の問題となるのである。かくの如きは、わが國民生活に於ける新文化建設の重大なる障碍である。人を造り、人を育てなければ、國家は興らないのである。人を育て、人を發奮せしめる力を、政治力がもたねばならぬのである。

志を起し、勤勞することによつて、その生活の中によろこびを掴み取らうとする志操を、國民の中にあつくせしめねばならぬ。勤勞を以つて、その志を成就する他に人生はなく、また勤勞を他にしては、知性に到り、德性をもち得る

道がないことが、國民の生活の實踐に於て、自覺せしめられねばならない。この國民大衆に於ける志の培育は、日本國民生活の傳統の粹をうけ、藝術の香氣と、科學と技術との總力を動員して、初めて可能な事である。ここに文が興り、一層に高い國民的禮節が生れる。その國民的禮節は、やがて東亞に普及し、そこに浸々として東亞諸國民の間に新たなる文化と習俗とを創るのである。こゝにわれらの雄圖はなるのである。

人々は今、この重大時局に於て、まだその考慮の中心を物におき、これらの總力を以つてして、物を造り、物を整へ、組織と制度とを更新しようとしてゐるが、それらの總力のはたらきかけのねらひ所が、これらの物的の範圍にのみ止り、人間を啓發し、その發奮によつて、人が悅びを以つて、各々その業に從ひ、業に於てはげみ、生活の安定を得、樂んで憂を忘れるに至らねば、國民生

活は飛躍的に向上しないのである。

勞務者住宅について

一、文化發揚の政治的方策としての住宅對策

住居は人にとつては、生活の本據であり、根城である。本據であると云ふのは、そこで人は身を修め、心を養ひ、體力を培ひ、今日の生活行動を反省する。即ち住居の中の人は、外面から觀ると、一見、靜的ではあるが、心と肉體の內部では、極めて活潑な生活を營むもので、決して靜的でなく、動的なのである。靜中動ありとは、生活の本據としての家の中の生活の理念であり、また現實でもある。而もこの內部的な活動こそ、實は生活の最も大切な斷面であり、これによつて人は、明日の更に新しい生活への出發を用意し、整へるのである。

「日々に是れ新たなり」と云ふ、人間生活に於ける、一路向上の生活體得は、街頭や仕事場に於けるよりも、むしろ、住み家の中、家の中に靜居するときの生活體得であり得るのである。

工場街の夕まぐれに、路傍に立つて見るがよい。汗にまみれ、油に浸みて、仕事場に勤勞した人々は、みんな家路に急ぐのである。銘々に、自らの家を求めて歸つてゆくのである。みんなわが住み家が戀しいのだ。勿論、一日の勤勞の勞苦を、そこで慰やしたいからである。家には彼を待つてゐる人があり、家路に急ぐ彼は、正しく待たれてゐる人でもある。

待ち、待たれる人が、その心の欲してゐるものを、その家に得るのである。この意味に於ては家は、どんなに狹くてもよい。どんな陋屋でもよいのである。心の生活の本據としての家には、規格などはなくてもよい。だが、どんなにそれが陋屋であつても、歸る人を待つ人の心境は、清らかで、朗らかでありたいの

である。人を待つに禮節を以つてし、人を待つに家の秩序をもつてし、人を待つに身邊の清掃を以つてしたいのである。心と體と家とを整へて待つ、これこそ家に待つ人の心境である。心の「住居」には規格はないが、ここに云ふやうな、待ちつ、待たれつする人々の、心と家とを整へることが、大切なのであらう。この意味に於て、住居は單なる經濟的問題ではなく、規格の問題でもなく、實に住む人その人の生活の本質的な問題である。ここに國民文化の本質問題としての、卽ち生活の本據としての住宅の問題が示されて來るのである。

勞務者の住宅對策は、從つて、住宅資材の配給をはかり、住宅建設資金を潤澤ならしめ、住宅建設のための土地の收容等の物的要件を整備することのみでは、住む人に、上に述べるが如き、生活の本據を與ふる所以ではない。住む人自らが、住む人としての品性をもち、それを高めることによつて、「日々に是れ

新た」なる、生活の體得を得る。家こそは、そんな人を造る環境——社會、世界でなくてはならない。

住宅對策はこの意味に於て、國民を育てはぐくむ仕事である。民力啓發の基本的な事業である。國民的資質を一層に宣揚し、國民の生活力を一層に高めるための、有力なる政治的文化的な國家活動として、住宅對策が爲政者の熟慮に上らねばならぬのである。住宅の量的不足を補ひ、家賃の昂騰を抑へて、生活の經濟的安定を策すると云ふ、國民經濟的問題としてのみの觀點から處理せらるべきではないのである。

二、住宅不足の根本原因

現下の情勢の下では、住宅對策は勿論その量の不足を解決するにある。だが、それは主として、都市、殊に大都市及びそれを圍繞する工業地帶に甚だしいのは周知の事實である。その因つて來る所は、無制限な人口の都市集中、即ち何

等の深き慮りなく、業を求め仕事を追ふて、都市に集中しつゝある人口に由來する所も相當に多いのである。この點に關して、國家は何等かの方法を講じなくては、到底住宅難の量的問題を處理することは不可能なのである。從つて住宅の不足に對處する途は、たゞ住宅の數を增加すればよいといふ單純な目的をもつてなされてはならないのである。大都市に無秩序に、無制限に集中する人口に、規制をたてねば、國民によい生活の本據を與へると云ふ意味での住宅對策は確立出來ず、また所謂住宅の量的不足を緩和することも到底出來ないのである。またかくするにあらざれば、謂ふ所の隣組組織も、またそれを基礎に建設される明朗健全なる新らしき自治體制の發達を促がし、社會に秩序を與へ、新たなる文化を促進し、國民の品質を向上することも不可能なのである。

人の住む家を建設し、生活の本據を勞務者に供給するのは、國民的文化建設の基本工作なのである。ただ量が足りればよいと云ふことではない。その量に

は常によき秩序が伴ひ、新らしい文化建設の仕事が伴はねばならぬのである。住宅建設に秩序と文化とを與へることは、人口の動きが、從來のやうに、ただ利を追ひ、慾にからんでの盲動ではなくして、それが常に國力の發展のため、國家的要請に對應する國民の生活力の秩序ある行動として理解せられ、またかくの如き立場に於て、政治的に處理されねばならぬのである。人口の移動は常に、國民の活動——生活力の遺憾なき發揚と云ふ大目標に從つてなされ、人口移動の狀態そのものが、如實に國力の充實、民力の發揚を示すことに一致しなくてはならないのである。人口の動きに秩序を與へることは、國家的要請に對應して勞働力の組織を正し、これを正しく配備することなのである。この意味に於ては住宅對策は勞働力の配置及組織の問題として理解せられねばならぬのである。即ち勞務對策を確立すること。大きく云へば、人——國民——勞働力を根幹とする國土計畫を樹立することによつてのみ、始めてよく住宅對策に善

處することが可能である。住宅に關する量の問題は、かくの如き理路に於て、勞働力の配置と移動と組織と、そしてこれらを基調とする國土計畫の樹立によつて、始めて本當の對策が生み出されて來ると思ふ。

住宅問題の量的處理はかくの如くにして可能であるとするも、ここに來ると、住宅の問題は、既に量の問題ではなくなるのである。

三、勞務者住宅建設は鄕土の建設である

工場の勞務者の多くは、全國の各地方から集つて來た人達である。彼等は志を立てて、鄕關を出て來てゐるのである。志を立てんとして生業を求めて集つて來てゐるのである。彼等は緣故をたどり、或は職業指導所を通じて仕事場に來てゐるのである。事業主は彼等を職場に迎へ、その志を護り育て、その生業を樂しませることに盡力すべきであり、國家はまた、事業主のこの責務の完遂を助けねばならない。

彼等には先づその志を立てるための生活の本據としての住居が與へられねばならない。即ち勞務者の住宅の建設は國民をして、その志を立て、その生業を樂しむことを可能ならしめる、國家緊急の方策として理解されねばならぬ。

現在に於ても、各事業主はその經濟力の及ぶ限り、資材の許す限度に於て勞務者住宅の建設に努力してゐるのである。併しそれはただ勞務者の數とにらみ合せるだけのことで、住宅建設は人間を住はせる箱をたてるのといふ意味でしかない。鷄舍や畜舍をたてる時に、農民がその疾病の發生を惧れ、陽あたりのよい、通風のよい、清掃のし易い、飼料のやり易いことを目標とし、且つ群生活に於ける運動の不足に備へて、鷄舍に小庭を附屬せしめるといつたやうに、人間がその愛育する畜類の生活に對處するために整へる諸種の用意にすら、勞務者住宅の建設に際しての用意は劣つてゐるではないか。勞務者住宅の建設は、勞務者にその志をとげるための、生活の本據を與へる仕事である。生活の本據

を與へることによつて、新たなる環境の中に、その鄕土を創造する仕事である。即ちこの意味に於ては、その工場住宅地面の環境の中に、工場勞務者の鄕土を建設し、特色ある文化を創造する仕事なのである。今日の勞務者住宅の建設には、この鄕土建設と文化創造の意義が忘れられて滅却されてゐるのである。ここにわが日本の工業都市政策の勞務對策、勞務者啓發の事業の文化的缺陷があるのである。ここに資本主義人生觀の誤謬が最も露骨に暴露され、文化的缺陷の最も端的なる左證が勞務者住宅建設事業に現はれてゐるのであると思ふ。

勞務者住宅の建設を、鄕土建設、文化創造の事業として理解し、實踐することが緊要なのである。鄕土の建設としての勞務者住宅の建設は、從つて全國の各地方から產業に召集せられたる血のつながりのない、全く因緣のない、無緣の人に、緣を與へ、血のつながりを與へ、道義を與へる仕事である。無緣の衆生を化して、有緣の衆生たらしめる仕事なのである。ここに眞の鄕土建設の意

義がある。ここに始めて隣組の基礎が築かれるのである。ここに始めて生活に於ける切磋琢磨、隣保共助の基礎が出來るのである。この基礎上に、鄕土に對する愛着が生れ、仕事を共にする作業場への愛着の基礎が成るのである。仕事と仕事場とに對する愛着は、實にかくの如き勞務者住宅の建設の上にのみ發展し得ると思ふ。

文化創造の基調としての勞務者住宅建設は、全國の異なる地方から召集せられ、異種の傳統と生活樣式とをもつ人々の集團であるあらびらきの鄕土に、新たなる文化を與へ、これに倫理と情誼とを生み出し、更に一層に高い生活の秩序をもたらし、生活の理念を一層に高め、生活の實踐に一層に高い國民的性格を附與する仕事である。ここに勞務者としての生活の最も特色ある性格が築かれるのである。かくすることによつてのみ、仕事場の生産的行動は、始めて國

民的行動に高められ、人格活動となるのである。

この新らしい鄕土の建設と、新たなる文化創造の仕事こそ、實は勞務管理の要諦なのである。勞働力に鄕土を與へ、その鄕土に國民的性格をもたらす仕事なのである。そしてこれは勞務者に對する文化工作であるが故に、勞務者はこの鄕土とその文化との中に培育せられて、彼の國民的性格を造り上げるのである。修身、齋家は奉公の基本要道なのである。この基本要道の上にこそ、産業勞務者の新らしい鄕土が建設せられ、その文化工作がなされねばならぬと思ふ。

四、勞務者住宅の建築規格

國民生活にとつて、上に述べるやうな重要な意義を有する勞務者住宅の建設の仕事は、從來はほとんど打ちやられてゐたのである。勞務者住宅の建設には、徹底した便宜主義と功利主義とが支配してゐたのである。例へば鑛炭山などの勞務者住宅の建設に際しては、如何なる方針がとられたかと云ふと、いつ鑛石

が出なくなるかもしれない。いつ炭層が無くなり、廢鑛になるかもしれない、企業それ自身の運命がいつ終りをつげるかもしれないのに、勞務者の住宅に金をかけることは企業經濟に合致しない、先づ當座の寢ぐらさへあればよいといふ方針がとられてゐたのは覆ふべくもない事實である。それだから勞務者は落ちついて生業に從事しないのである。かかる方針だから、勞務者はその生活力を培ひ、身を修め、家を齋へることが不可能なのである。ここには徹底した資本主義が支配し、人間を育て、國民力を培ひ、勞働力を涵養することによつて、事業の繁榮を期しようといふ意志は毛頭なかつたのである。鑛炭山の勞務者住宅には、鄕土なく、文化なく、國民的性格はなかつたのである。從つて鑛炭山住宅――一般的には產業の勞務者住宅の全部には、國民的性格の建設がなされて來なかつたのである。

勞働力に國民的性格を附與し、この住居の中に、日々に志を立て、天業翼賛

の日常生活行動を築き上げるためには、住宅建設に際しての、上記の如き資本主義的觀念を一掃しなくてはならぬ。住宅建設の便宜主義功利主義が全面的に排除されねばならぬ。生活に本據を與へる仕事は、國民の生活力を本質的に高める仕事として、住宅建設の實踐に具現されねばならない。

一般に勞務者住宅の建設には、土地の選定が先決要件である。これが現在では全々機會主義に墮してゐる。都市の勞務者の住宅地域は最も地代の安價な地區を撰ぶといふ以外に方針はないと云つてよいのである。從つてそこに撰ばれたる土地は、大抵は低濕地で、不健康地である。都市及その近郊の低濕地、不健康地域は、勞務者住宅の最も有力なる候補地であり、現存地であるといふことになつてゐる。工場立地計畫や都市計畫はこの點に對して重大なる考慮を拂ひ、工場計畫を刷新し、國家的方針を確立しなくてはならない。

次には住宅地區の地區割、區劃割は住宅建設の第二の要件である。防火、防

空に關聯する方面の事項は、相當やかましく規定され、住宅の安全を確保する手段が種々講ぜられてゐるのであるが、一歩郷土と文化の建設といふ本質的な事項になると、殆んど手がふれられてゐないのである。特に保健的交通的規格に於ては、その生活への影響の直接に重要なるにもかかわらず、ほとんど工夫が缺けてゐるのである。勞務者住宅は、生活態様と衛生と交通との三點を考慮して、その地區割を規制することが大切であると思ふ。またこれに附屬して、勞務者住宅の過群生活を改善するために、一定の廣さの地區に對して、一定數の戸數の制限を附與し、また地域内の住宅の配置、配列につき、規格を立て、自然的環境に適應せしめる方途をも講ずべきである。從つて、聚落としての住宅建設に際して、ここに所謂勞務者アパートの新様式が一段と工夫せらるべきであると考へる。

わが研究所に於て行はれた勞務者住宅についての調査の結果の示すところで

は工場都市の傳染病の流行地は、勞務者住宅の密集地に相當してゐたのである。これは上記の如き、住宅地の撰定の不備、地區割の不整とともに、その排水、汚物清掃の仕事が住宅建設に際して考へられてゐない左證である。

勞務者住宅の建設が勞務管理の基本要目であると云ふ意味は、生活の向上、生活を本質的に高める仕事に工場の勞務管理の手が行き屆かねばならぬといふ意味である。從つて勞務者住宅聚落の建設に際しては、勞務管理の角度からこれを規制すべきである。

私の考ふる所によれば、勞務者住宅の一聚落單位を五〇戸とする。一つの住宅地域には、五〇戸を單位とする聚落が幾つか建設されるがよいと思ふ。隣組は一聚落に五個とし、一つの隣組は一〇戸を以つて結成される。住宅の個々は劃一的な規格をもたせず、二間住宅、三間住宅、四間住宅の三種の區別をたて、

これらの三種の住宅を適當の數、例へば、四間住宅は五戸、三間住宅は一五戸、二間住宅は三〇戸の如き割合を以つて建設する。五〇戸を以つてする一聚落單位に對して、一人の生活指導者を配置する。この指導者には職場での練達の士を任命する。また住宅の供給には必ずしも工場内の職分的地位の上下を以つてせず、家族人員數などの點をも考慮に入れて、多數家族を扶養してゐる人に對して、大きな住宅を與へるやう考慮することも重要なことの一つだと思ふ。

私の特に工夫したいと思ふことは、現下の産業界の情勢に於ては、晝眠夜業の勞務者が著しく增大しつつある。この情勢に對應して勞働力の健全を保持するためには、勞務者に晝間の安らかなる快眠を得さしめる爲の、住宅の建築の工夫である。これに對してはただ住宅建築に工夫をこらすことだけでは十分でない、必ずや社會的施設或は別個の工夫、例へば集團安眠所などの建設が考慮

せられてよいのであらう。

五、新鄕土としての聚落の社會的施設

勞務者住宅對策の次の重點は、その社會的施設の擴充にあると思ふ。住宅對策の倫理的文化的貧困が、社會施設の貧困を生み出してゐるのである。住宅政策に於ける經濟至上主義が、社會的施設と文化工作との不整備の根本原因をなしてゐるのである。

住宅それ自身は、極めて簡素でよいのである。社會的施設を擴充し整備することによつて、生活を更に一層豐富にするのである。住宅建設は鄕土建設であり、文化創造にあるといふ主張は、最も明瞭にその社會的施設に實現せられなくてはならない。

勞務者住宅の社會的施設は、事業主や住宅建設者にも協力して貰はねばならぬものであるが、國家自身がその主動力となつて、その實施に乘り出すべきで

あると思ふ。勞務者住宅の居住者をして、眞に皇化に浴せしめるために、社會的施設が擴充せられねばならぬのである。社會的施設としては次の如き項目があげられると思ふ。

一、生活必需品の配給所
二、健康相談所
三、集會所
四、兒童遊園——空地(約四〇〇〇人の人口に對して一町歩)其他小遊園地
五、共同浴場
六、共同洗濯所
七、簡易圖書館

勞務者の聚落は五〇戸を單位とし、この單位聚落の六つ即ち三百戸が一鄕土を構成する。かかる鄕土の一つ一つは、出來る限り、事業場を中心として、四

方に散在せしめる方針をとるがよいと思ふ。これらの鄕土に對しては交通機關や社會的施設が十分に考慮せられねばならない。

當時五〇〇人以上の勞務者を使用する工場の建設に際しては、その住宅(住宅及寄宿舍)の建設計畫を必須の要件として、認可が與へられねばならない。而してその際には、以上の社會的施設を必須の要件とせらるべきことは言ふまでもないことである。

特に勞務者たる青少年に對しては、私はその生活活動の一切を擧げて、國家的訓練の下に置き、これに國民的性格を育成することこそ、勞務管理の最も重要なる方策と信じてゐる。從つてこれらを一定の規格の下に建設せられたる寄宿舍に收容し、その生活の指導と訓練とを强化する必要がある。然るに現今の法規に於てはただ危害防止と、衛生とに關する最少限度の事項が規定されてゐるに過ぎない。これらの法規を全面的に修正し、生活訓練所としての寄宿舍の

建設に、正しい規格を與へねばならぬと思ふ。

私案によれば青少年の寄宿舍には下記のやうな規格を以て臨むがよいと思ふ。

一、約五十人の青少年を一班とする、これに一人の指導者を配すること。

二、六班を以つて一組とする、一組は約三百人、一組毎に組長を配する。

三、約四組を以つて一團とし、一人の團長を配置す。

以上の如き青少年生活指導の方針に基づき、寄宿舍建設が具體化されねばならない。一棟の寄宿舍には一組、即ち六班、三百人の定員を最大限度とする。而しこれは最大限度の一棟の收容單位であつて、これ以下の少數の收容人員を以つてする場合は尙更結構である。而し一棟三百人を超へる收容人員の寄宿舍の建設は許可しないことにするのである。約千二百人の青少年工のゐる工場では、少くとも四棟の寄宿舍を建設しなくてはならぬことになる。經濟的に餘裕のある、そして土地の條件に惠まれる事業場に於ては、この收容人員の限度は

もつと引き下げられ、一棟約五、六十人から百人の收容人員にするがよいと思ふ。

勞務者の住宅又は青少年の寄宿舍に附屬して、小園圃を設定することも亦、社會的施設としての重點の一つである。現代の工場勞働は著しく分化し、單一化し專門化してゐる。その作業は極めて單調に無味乾燥である。勞務者はかくて極度の機械化の生産工程の中に、單調なる部分的作業を持續的に行はねばならないのであるから、例へ彼等が、その仕事に興味をもち得、彼等の分擔する部分的作業が、その全體の生産への關聯性に於て、極めて重要なるものであるとの認識をもち得、そのために彼等がその單調な部分的の作業に對する責任と任務とを自覺し、よく精勵することがあり得るとしても、彼等は實に異常な努力を以つて、彼等の倦怠と鬪ひ、彼等の心の中に起る精神的弛緩を克服するために努力せねばならないのである。

彼等のかくの如き生産場裏の生活に對して、一沫の慰樂を與へることは、勞

務指導者の任務であらねばならぬ。小園圃を住宅に、寄宿舍に附設することは、そこに重要なる意味がある。卽ちこの小園圃に於ては、たとへ、その土地は一坪であつても、數坪に過ぎなくても、そこに種子をまき、それの發芽を待ち、これに施肥し、除草し、花を待ち、その實のりを悅ぶことは、この小園圃に於ける勞働者の手間仕事の中に味ひ得るものである。育成の仕事は人間の上乘の慰樂である。この慰樂が勞務者の鄕土の建設を確立せしめ、鄕土にうるほひをもたらし、勞務者の生活內容を豐かならしめることに役立つのである。

小園圃に附屬して、鷄舍が設けられるのも更によい。かくて經濟的の餘裕のある經營に於ては、園藝と養鷄との指導者があてがはれることは、その慰樂を一層に享受し活用するためには、更に望ましきことであると思ふ。

勞務者住宅には簡易圖書館がおかれ、そこには技術的敎養の向上、文化的啓發、生活の向上に關するあらゆる良書が精選せられて、勞務者の自發的な敎養

欲求が滿されてゆくことも大切なことである。特に靑年たる勞務者に重點がおかれねばならない。

六、よき住み方の創造

文化創造の具體的方法としては、新らしき鄕土に、よき住み方を創造することである。この點に於ては、勞務者住宅建設は、勞務者の敎養の問題、家族人の敎養問題と密接に關聯する。住宅の中、寄宿舍の中は、常によく住みこなされ、そこに禮儀と節度と規律と、そして豐かさとが生ひ立ちて行かねばならない。

簡素な住宅の中で、良き住み方をする勞務者を造り上げることに努力することが、勞務の指導者の重要任務として理解されねばならない。これは同時に戰時下の國民生活に對して重大な意義をもつ仕事である。

住宅が人間の日常生活行動の反省の場處であり、日々に是れ新たなる生活の據つて以つて發育するところである。ここでその日の生產的仕事場での生產的

活動と技術についての反省をもつのである。ここで明日の潑剌たる勞働力が蓄藏されるのである。住宅や寄宿舍は正しく勞働力の生れ、發展する根城である。

この意味に於て、住宅は簡素でも、その中でよき住み方、よき生活樣式が確立されるやうに指導力がいたされねばならない。これは個々の事業場にのみゆだねらるべきことではなくて、新鄕土に新らしき文化を、國民的文化を、創造する仕事であるから、國家は全力をあげてこの仕事の完遂に援助の手を伸ぶべきであると思ふ。

よき住み方の指導と社會的施設の整備とは、人格としての、國民的資質としての勞働力を育成する手段としては、車の兩輪の如きものである。よき住み方の指導には、よき社會的施設整備を必須とし、社會的施設の整備とその活用には、よき住み方の指導を必要とするのである。

よき住み方の創造に際しては、次のやうな基本要件が注意されねばならない。

一、住宅及寄宿舍に於ける衛生的保健的要件が確立されること。
二、個々の住宅には祭祀の中心（神棚、佛壇）がなくてはならない。
三、住宅内の調度が住宅の設計に相應して整備されてゐること。
四、床の間の裝飾に創意を致すやう指導がなされねばならない。
五、清潔で保健的で便利で能率的な臺所、炊事場の設計。
六、よき住み方を創造するために、住宅地區に衣食住に關する科學的文化的教養を促進する組織又は相談所の施設をなすこと。

これらのよき住み方の指導は概念的であつてはならない、常に最も具體的な方法に於て、たゆまざる努力を以つてなされねばならない。整つた勞務者住宅のよき住み方の中に生産技術と生産的活動への反省が生れ、この反省に基づいて、生産技術の發展がなされてゆくのである。生産技術の發展に基づいて、生活の向上がみられる。かくて技術は勞務者の生活の内容となり、生産的活動は賃銀

の仕事としてのみではなくなるのである。從つて住宅地區には、生活の相談所がおかれ、衣食住に關する科學的指導が懇切になされる必要があるのである。

四季に應ずる床の間の飾りつけも、最も簡素の中に、自然の環境に適應して、その生活を更新する手段の一つである。正月の家庭料理も、お盆の行事も、三月節句、五月節句の家庭的行事も、佛事も祭祀も、あげて、正しい規範の中に、氣がるに、自然に、行はれるやうにしたいものである。ここに指導の必要があるのである。特に多くの勞務者住宅には、老人は極めて少ない。老人のゐないことは、よき傳統がわすれられ、日本文化の傳統が勞務者住宅に失はれる主要な原因の一つである。吾々は傳統の凡てを固守する必要はない。更に新たなる生活力を以つて、よき傳統を一層に高め育てゆく義務をもつてゐるのである。これが新鄕土建設の事業の一つでもあると思ふ。

七、結　語

勤勞する大衆に、ただ單なる夜のねぐらとしての住宅ではなく、生活の本據としての住み家を與へてほしい。身を修め、心を養ひ、體力を培ひ、生活行動を反省し、生活に希望をもち、勇氣づけられ、生活を樂しむ住み家を與へてほしいと思ふ。

勤勞層の住宅問題は、現實に差し迫つた問題としては、その量的不足を克服することでもあるが、勿論それには保健衞生の要件が滿たされ、住み家としての規格が樹立せられ、それがまた住み家の建てられる自然の景觀によく合致しなくてはならぬ。また住み家やその聚落の配置によつて、新たなる自然的景觀を創造しなくてはならぬ。

住み家の建設が、その自然的景觀によく適應し、或は新たなる景觀の創造に成功を收め得たとき、そこに住む人は、始めてその生活に落ちつきを得、生活の中に樂しみをもつことが出來る。從つて住宅對策は、ただ單なる經濟政策で

はなく、國民文化の問題である。即ちよき住み家を大衆に普ねからしめることによつて、國民を育てはぐくむ仕事であるから、民力の啓發の基本的な仕事の一つである。人はよき住み家の中に、生活の安定と慰樂とを得、その人生を向上し、國民的資質を一層に高めることが出來るから、住宅對策は文化を向上する仕事なのである。

かくてよき住み家に、よき住み方の習俗が創造せられ、住宅街の景觀は、自然と人、人と人とが、互に相親和し、愛惜し、業につとめ、業にはげみ、以つて人生を向上し、文化を高める生活の姿を表現して來るのである。ここに於て、人の生活に盛んなる生活意欲が、滾々として湧いて來るのである。「源泉滾々として晝夜を分たず、常に盈を滿たして進む」と云ふやうな、國民生活の情景は、住宅對策の最高の理念として、常に識者に考慮せられねばならぬと思ふ。

疲勞と休息

一、疲勞した人に起る狀態

働いても疲勞しない工夫はないか、たとへ疲勞しても、これを速かに且つ確實に回復する方法はないのであるか、疲勞の測定方法は如何、それも實驗室でやられてゐるやうな、難かしい科學的操作によらず、誰にでも出來る、最も簡單な確實な方法はないのであるか、それによつて、疲勞を豫知し、疲勞を防止し、疲勞の度合を知つて、これに善處することが出來るではないか。勞働科學研究者は、かかる重大問題に對して、全力を傾倒すべきではないか。これらの甚だ蟲のよい、併し萬人が熱望してゐる問題に、私は過去二十數ヶ年惱まされ

つづけて來たのである。

實際に於て、疲勞の本質に關する問題ほど難解なものはない。凡そ近代の生理學が基礎づけられて來てから、疲勞問題は優れたる生理學者の努力しつづけて來た問題である。更に近代の機械工業の興隆は疲勞問題の解決の必要を、一層に深刻ならしめ、産業社會からの痛烈なる要求となり、勞務者の問題は疲勞問題であると云つてよいほどに、社會の注目を惹いたのである。

併しながら、疲勞は勞務者のみの問題ではない。凡そ生物——生活體系をもつてゐる凡てのものが當面する主要な生活問題の一つである。人はみな疲勞の來ることを豫知せんことを欲し、疲勞を防止することを熱望してゐる。併し健康者も、病者も、男も女も、小兒も老人も、將兵も勞働者も農民も、凡そ生活をもち、生活活動をいとなむものの凡ては、疲勞の來襲を避けることは不可能である。死が生命あるものの究極の運命である限り、疲勞は生命あるもののも

つ必然的な生活過程である。

生活活動によつて、あらゆる人々は疲勞する。過激な仕事を長時間つづけてゐると疲勞が起つて來ることは周知の事實である。併し一日中、何の仕事もせず、怠けてゐても、また一日、所用のため、自由行動を束縛されてゐるやうな場合にも、夕方には疲勞し、起きてゐるには相當努力しなくてはならないやうになることもある。かやうな疲勞は、一體何から來るのであるか。これらの疲勞の本質については、隨分研究されて來た事項であるに拘らず、一切明瞭を缺いてゐるのである。

身體的疲勞は、筋力を過度に使つた場合に起るものである。併し筋中のエネルギー源又は細胞の中に含まれてゐる物質が實際に缺乏するためであるか、或は疲勞物質の蓄積により、この物質が大腦に作用するために起るのであるか、それがまだ十分に明白にされてゐないのである。一部の學者（例へば英國のヒル

教授一派）は、筋の疲勞は筋及び血液中に乳酸が出來、これが蓄積することに原因すると主張したことは周知の通りである。即ち筋の收縮の際に、乳酸が發生し、これが血液中に入り、時としては一〇〇ミリグラム・パアセントになることすらあるが、この乳酸こそ疲勞の原因であると云ふのである。この乳酸は血液中に貯藏されてゐるアルカリによつて中和されるが、過剰の乳酸は、呼吸によつてとられたる酸素によつて、筋糖質、即ちグリコーゲンに生成せられ、餘分のものは更に燃燒して炭酸ガスと水とになつて了ふ。また筋及び神經細胞の勞作によつて出來た物質、即ち窒素と燐とを含む分解生產物が、果して疲勞現象を起す原因であるかどうかについては、未だ十分に明瞭になつてゐない。

かく疲勞の本質に關しての、科學上の見解は未だ多くの疑點と不明瞭とを殘し、その科學的檢索の餘地が多方面に涉つて要望されてゐるのである。併し、疲勞發生の機序や、疲勞の理論を知らうとする前に、吾々は疲勞した人の現は

す現象についてこれを周知するの必要がある。この現實こそ疲勞研究者の出發點をなすものだからである。

疲勞した人の姿勢は實に特有なものであることに眼を向けるがよい。即ち彼の腰はかがみ、彼は膝關節を最早眞直に保つことが不可能となる。彼はまた一種獨特の顏貌をあらはして來る。眼を一ぱいに開いてゐることが出來ず、半開狀態になる、下顎が稍々下る。凡ての動作は新鮮性を缺き、遲緩し、不正確になり、協調がとれず、間違を起し易くなる。頭部は前に垂れ、恰度、居睡りをこらへてゐるやうな格好になる。精神的作業が不活潑になり、答へがすぐには出來なくなる。思考統合能力が低下し、言語は不明瞭に且つ流調に出來なくなる。また注意力、記銘力がおとろへ、精神的態度が鈍くなり、計算、記憶等がいづれも惡くなる。

疲勞したものの示すこれらの狀態は、高度の疲勞（身體的並に精神的）に陷つ

た人を觀察すれば、直ちにこれを確めることが出來る。

疲勞した人はかかる外觀を呈するのみならず、彼の精神狀態も亦、特異な態度を現はして來る。疲勞に陷つてゐる人自身は、彼に與へられたる身體的精神的な課題を實行することが困難になることを自らよく知つてゐる。そして自ら休息を乞願ひ、睡眠を要求する。かくなれば彼には疲勞したと云ふ自覺が起るのである。併し輕度の疲勞はかくの如き自覺なしに起り得るものである。

然るに他方、盛夏、農民は一日中、水田に田の草をとりて働き、夕、滿月に乘じて盆踊を催すとき、彼等は全々疲勞を感知しないこともあり得るのである。かくの如きは一體いかに說明せらるべきであるか、未だこの因つて來るところを明らかに解答し得る人はないのである。

人々自身に體驗される、かくの如き主觀的な疲勞感覺には、二つのものが區別されねばならない。即ち疲勞の感覺と疲勞の感情とである。疲勞感覺は局部

的なもので、手、足、腰と云つたやうな、身體の一部に局限された感覺であるが、疲勞の感情は局部的ではなく、全體的なものである。例へば、今若し人が重い石塊を兩手を以つて水平にささへてゐるとすると、決してこれに長くたえることが出來ない。即ち支へてゐる手に、痛みとつかれを感知する。この痛みと疲れに堪へることが不可能になつた時、石を投げすて、短時間休めば、痛みも疲れも手からぬぐひ去られる。即ち局部的な疲勞感覺はなくなるのである。然るにこの石塊をささへる仕事を何回もつゞけて、數時間にも及べば、その結果、遂に疲勞が來る。これは全身的なもので、ここに來ると、この疲勞は直ちに去らない。局部的ではなく、全體的な疲れである。この疲れは確かに一種の感情に屬するものである。

靜止作業、例へば重い重量を前方にさしのべた兩手で支へると云ふやうな場合には、數分ならずして、腕に痛みを感じて來る。この痛みは多分、筋の緊張

によつて、その筋肉の血行が妨げられ、疲勞物質の排除が阻止されるために起るものと思はれる。勿論、筋の緊張によつて靱帶が引つぱりつけられたり、或は關節囊が引きつられることも、この痛みの原因であるであらう。

長途の旅行の後に力の要る作業をなし、或は日常慣れてゐない體操などをやつた後には、腱の附着點や、關節を結びつけてゐる靱帶や關節の接觸面等に痛みを伴うた疲勞感覺の起ることがある。かかる疲勞感覺、即ち何か再び運動をやる際に起る疲勞の感覺は、組織や關節の粘膜に、强く而も長く外力が作用したために、その表面に水泡を作り、充血を來したりすると同樣で、外力の異常な作用であつて、疲勞ではなく、外傷の一種である。

近くは、今から十年ほど以前に、日本の製絲作業技術に大變革が起り、一齊に、低溫繰絲法が採用せられることになつた時のことである。從來は主として座業に從事してゐた女工達が、この技術的變革と同時に、立業となり、而も三

間もの長さのある繰絲臺の前を、作業時間中、終始、横あるきをしなくてはならぬ狀態になつたのである。

この時私のところに、製絲工場の管理者の人々が、さも重大事が發生したといふやうにかけつけて來て、最近女工達に足をいためるものが著しく增加した。その原因を檢べて見ても、どうも判らない。多分、疲勞に原因してゐるものと思ふ。どうすればよいかと尋ねられを向が、二三にして止らなかつた。何でも原因の不明の痛みがあると、疲勞に歸する。一般人は勿論醫師にもその傾向が多分にある。この製絲工場の女工の足の痛みも、技術の變革によつて、嘗つての座業者が日常慣れてゐない、立業者となり、而も人間の習性に非ざる横あるきしながら作業することになつたがため、足關節に、異常な作用と負荷とを强ひることになつたために起つたものである。半ヶ年もすると、この問題は自然に解消し、それを訴へる人はなくなつたのである。これなども、疲勞のための

痛みの感覺ではなくして、外傷性の痛みの一種である。

このやうな局部的な痛みの感覺は、現今の産業界の從業員に屢々起るものであつて。人々はこれを疲勞と混同してゐるのである。この痛みの原因は何であるか、思ふに、日常慣れてゐない作業に相當に我慢して從事した後に、休息をとりたる後、或は一夜の快眠をむさぼつた後に、再びその不慣れの作業に從事する時に起るのである。從つて未經驗勞務者や、作業轉換者に多く來るのである。この痛みの感覺は、多分、疲勞したる組織に組織學的な變化が起されてゐるか、或は小さな壞死または炎症、或は滲出があり、これに原因して、痛みが感覺神經によつて中樞に傳達されるものであらうと思はれる。

これに反して、疲れと云ふ全體的感情は、筋の感覺を司さどる神經の昂奮によつて起るものではない。筋や神經の勞作によつて、組織内に化學的生成物質が出來、これが體液の中に入つて、神經中樞に作用し、疲れの感情を起し、遂

には作業の中絶を欲し、休息を欲求し、睡眠を催すに至るのである。

註 一 Weichhardt は高次分子を有する物質 Kenotoxin を想定し、これを疲勞物質と唱へた。

二 Müller 等は勞作に動員されてゐる神經及筋自身から、血中へのイオン移動が疲勞現象に關係ありと考ふ。

三 筋纖維の收縮によつて、細胞に酸の生成を促がし、これが種々のアルカリ鹽類、例へば燐酸鹽を溶解性のものとなし、カリュウム鹽の電解を可能ならしめる。

四 筋細胞が絶へず勞作をなし、その結果として持續的に酸性化すると、細胞膜の透過性を高め、こゝに著しいイオン流出が起る。

五 運動神經によつての、筋の强い昂奮は、筋から血液へカルチュウム及カリュウムの流出を起す。併し運動神經では昂奮とゝもに、神經の内索から外索へカリュウム・イオンが出て行く。このカリュウム・イオン群は組織膜を弛め、カルチュウム・イオンの神經からの流出を促進する。

六 神經系の全般的昂奮に際して、例へばカンファ・コフェイン、βテトラ・ヒドロ・ナフチイル・アミン等によつて起される神經系の昂奮は、血液中のカルチュウム常量を增加する(Clytta 等)。血液中のカルチュウム量は神經系の昂奮によつて犬及び猫では平均九・七%、家

兎では一五・二%高まる。またカリチュウム量は犬では一六・七%、猫では三一・〇%高まる。

七　神經系の强度のカリュウム量減退は、麻痺樣の過度疲勞狀態を起す。

八　全體的昂奮の際に見られる血液中のカリュウム及カルチュウム增加の大部分は、筋肉中から流出したものである。(Cloetta)

以上のやうな實驗的な見解からすれば、神經や筋の勞作の際には、組織中に化學物理的變化が起ること明瞭であり、その最も注目さるべき一つのものは、體組織――特に勞作に關與する組織相互間に於けるイオンの移動であると云ふことが出來る。

今吾々はかくの如き體內部に起る現象を頭に畫きつつ、局所的な疲勞感や全身的な疲勞の感情を掘り下げて行かねばならぬ。而も若し吾々が疲勞の感情といふ概念の上に、感情を云々しやうとするならば、疲勞した人間の心的狀態、精神の働きについて、當然に觀察の步を進めなくてはならぬ。

疲勞の感情の起つた場合には、注意力が惡くなり、注意の集中力が失はれ、

思考力や記憶が惡くなり、熟睡がとれなくなる。又適確に自分の考へてゐることを云ひ表はすことが難しくなるから、氣短かになる。時とすると發語が困難になることがある。これは疲勞の感情の象徵であつて、所謂「精神的疲れ」であると云ひ得られる。

身體的な方面を考へると、先づ運動が不活潑になり、速度がおそくなる。身體の力がぬける。卽ち脫力狀態とでも云ふか、かくなると步行もあやしくなる。身體的に疲勞を感じてゐる人の主徵はかくの如きである。また確つかりした姿勢が保てず、頭部を眞直にしてゐることすら出來なくなる。この上更に所謂局所感覺が起る。局所感覺と云ふのは、下腿が重く感ぜられたり、眼瞼をひらいてゐることがむづかしく感じたりすることをさして云ふのである。かくて遂には、人は休養を欲し、睡眠を欲する。休養や睡眠の欲求が起るのは、全體的なもので、最早局所的な感覺ではないこと勿論である。

疲れの感覺は、本人がそれを自覺してゐるといふ點で、疲勞と區別せらるべきである。云ひ換ふれば、疲れの感覺を伴はない疲勞があり得るのである。又疲れの感覺が起つてゐても、それを意志的に征服し、意志的努力を以つてその自覺を抑壓してゐる場合もある。

「疲れてゐる」といふ自覺は精神力學的な事象であらう。疲勞が來ると共に、精神活動に必須なるある力源——動力がなくなるために、「力行」とか「努力」とか、「自ら進んで爲す」と云ふやうな、「自覺的な行動」がやれなくなり、時としては思考力や論理的な能力も低下するに至るのである。從つて「疲れ」てゐる人には、物を考へる力には、秩序がなくなり、正しくなくなつて、間違ひが多くなる。卽ち疲れてゐる人の思考は、云はば一場の夢の如きものであるが、この狀態が更に深刻になると、その人は遂に眠りに陷るのである。

疲勞の本質については、まだ科學的に適確な論證はないのであるが、上述の

やうな「疲れた人」の現はす心身の狀態、「疲れた人」の生活上に現はれる諸徵候をつぶさに觀察すると「疲勞する」ことほど危險な生活狀態はないといふことがわかるであらう。

上述の疲勞の徵候のどれを一つとりあげても、產業界に於ける人間の作業と考へ合せると、誠に身の毛のよだつのを覺へる。勞務者に疲勞をさせないやうにすること、上述のやうな生活態度を作業場に於て現はしてゐる人を、そのまま見のがし、つづけて作業をさせておくことは許されないと思ふ。

疲勞した人は言語を聞くことが出來るが、併しその言葉の意味を理解することが出來なくなる。言葉を記憶することすらむづかしくなる。また其の言葉に關聯して、聯想する力が乏しくなる。これらは主として注意力及びその集中力が弱められて來るためである。卽ちかゝる狀態にゐる人は、大腦の皮質の働き

が、疲勞のためにやられてゐるのである。大腦皮質の中樞神經細胞の機能障碍は、顯微鏡的な小體——小部分に起つてゐる疲勞の現象であるが、その及ぼす影響は誠に大である。身體の一部分にかゝる狀態が發生してゐる時に、人々はこれを意識せず、或は意識してゐても、他の欲望——例へば賃銀をとる爲、生産能率を高めるために、努力奮勵して働らき、或は疲勞したかかる人を强制的に更につづいて作業に從事せしめようとするのである。産業災害の原因の排除に關しては人々は機械設備や安全裝置の整備にのみ注目してゐるやうであるが、それも必要な方面ではあるが、それよりももつと重大な災害の發生の原因が、人間自身、否、人間の身體の大腦皮質の顯微鏡的な極小部位に起つてゐる事實に基づくのだといふことについては、餘りに重大視してゐないことは誠になげかはしいことである。

二、疲れと睡眠

人間の聽覺器（耳）は、起きてゐる時でも眠つてゐる時でも、同樣に外來の音響を受け入れるやうに出來てゐる。眼は眠つてゐる時には閉ぢてゐるが、耳はあいてゐるのである。また皮膚の感覺——痛覺、溫覺などいふのも、眠つてゐるときにも、起きてゐる時と同樣に、その感覺器は嚴存してゐるのである。然るに人間は眠つてゐる時には、少々の音はきこへない。眠つてゐる時に聽へないと云ふのは、これらの感覺神經から腦幹に傳へられる感覺刺戟が睡眠中に弱められるためであるのか、或は刺戟は傳へられるけれども、それが知覺を起さないやうになつてゐるのか、或はまた大腦の睡眠葉の皮質部の中の聽覺中樞が、睡眠によつて、注意力をこれに向けることを阻まれてゐるのであるか、これらについての科學的見解はまだ全く不明瞭だと云つてよい。これと同樣に强度の疲勞の際に音をききのがしたり、音が聞へなかつたり、することの原因についても、まだ明瞭な科學的說明をすることも出來ないのである。

註一　睡眠が來ると大腦への感覺的印象の求心的傳達が侵されるのみならず、大腦皮質の運動中樞から起り、錐體經路（Pyramndendalm）を通つて運動を起す遠心性の傳達も侵され、遂には錐體外徑路（extrspparnnclalen system）から筋に與へられるトーヌスもなくなる。

二　Demole は猫の灰白隆起（Tuber Cinereum）に Cacl の 0.00025 を注入し、猫を眠らせた。この際猫は眼瞼を閉ぢ、縮瞳症（myosis）を起し、筋は脱力し、全ての反應は消失した。この實驗に於て彼は $Cacl_2$ が漏斗狀部周圍腦質（periinfundibulare Subst）に達したる時に於てのみ睡眠が起ること、從つて、睡眠に關係ある部位は視神經交叉基部（Supra chiazmatische）の漏斗狀部周圍灰白質（parainfundibulare Grau）と灰白隆起（tuber Cinreum）であると云ふ。

三　若し睡眠はこの實驗の結果の指示するやうに、睡眠を司さどる中樞部にカルシュームが與へられることで起るならば、それを如何にして取るのであるか。Müller によると、日中に於ては身體的活動の結果として、神經筋組織系からカルシュームが血液中に移行し、そこに過剩のカルシュームが存在する。これが夜になると漏斗狀部隣接組織（Para infundibulare）の方へ移行する。そこで神經的な抑制作用及び副交感神經の昂奮が起される。これによつて睡眠が起るのだと云つてゐる。この見解によれば日中の生活活働によつて神經筋組織系に起

つた分化的新陳代謝現象が、夜分には合成と充足とに反轉するのだと考へられる。

四　事實に於て、睡眠中には麻痺現象が起り、また神經支配が中止されると同時に、逆な現象も起るのである。即ち睡眠中には瞳孔が縮まり、膀胱の括約筋（Sphinkter）のトーヌスが增加し、副交感神經支配が强化され、交感神經系のトーヌスが弱められる。

植物性神經系の支配の下にある內臟諸器官の働らきは、起きてゐる時でも、眠つてゐる時でも、ちつとも變化はない。全く同樣に働いてゐるのである。これは他の言葉で云ふと、內臟に關する限り、夜分ねてゐる時でも、日中働いてゐる間でも、そこに起るエネルギーの生產と消費の關係には差がないのである。また分化と合成の過程も變化がないといふべきであらう。

この點から云へば、腸だの、腎臟だの、肝臟だのといふやうな內臟組織には疲勞は本質的には起らないのである。

併しここで注意を要することは、疲勞の究極として睡眠が來るのであるが、

睡眠を起すものは必ずしも疲勞だけではないと云ふことである。例へば空腹時に御馳走のことを考へると、口中に唾の分泌が起ると同樣に、單調な面白くもない講義がもたらす環境、或は數人の人が座談にふけつてゐる場合に、一人の人がアクビをすると、次々にそれが傳染し、一座のものがねむ氣を催して來るなどは、人々の體驗してゐるところであるが、これらは所謂條件反射として、睡眠を催して來ることがある。卽ちこれらねむ氣を催す條件を整へれば、人は眠ることが出來るが、その反對に、强い光が眼にさし込んだり、强い音響があつたり、蚊にさされて痛みを感じたりすることは、眠りの防害になる。疲勞した人を眠りに入らしめやうとすれば、これらの眠りを妨げる原因を遠ざけ、眠りに入り易い條件をととのへてかからねばならない。

かくの如き事實は衆人の日常の生活體驗によつて至極明白なことであるが、科學的な意味でも、誠に興味のある、大切な事項である。勞務者の疲勞と休眠

の問題を處理する際には、これらの點を十分に考慮しなくてはならない。

三、勞務者にはよき、十分なる眠りの必要なる理由

「疲れ」と「ねむ氣」とを克服することが出來るか、勞働や生活活動の後に來る「疲れ」をせきとめ、睡氣の起らない方法があるかどうか。

深更にいたるまで何事か一生懸命に仕事をしてゐると、睡氣が消退し、遂にばねむくなくなることは、常に人々の經驗してゐることである。また夜中に電報を受け取り、肉親の死などが報ぜられると、睡氣がなくなる。墮氣に滿ちた講義をきいてゐて睡氣がさす時には、立つてこれをきけば、ねむけが去る。これらの日常生活の體驗は、疲勞の窮極の徵候としての睡氣を消退する方法である。併しこれらの事實は決して自然な方法ではない。工場で生產的な仕事に從事する人達は、意識的に或は無意識的に、かかる不自然な方法によつて「疲れ」と「ねむ氣」を克服してゐる場合が往々にしてあるのである。卽ち時としては

就業規則の威壓の下に、時としては同僚に對する、上役に對する義務の觀念から、或は生産工程を護る任務の上から、また時としては、賃銀への慾望にから れて、彼等は「疲れ」を克服し、「ねむ氣」と戰ふのである。

産業前線の生産活動は、かくて生理的な、即ち生活活動の後に來る、極めて自然な生理的狀態としての「疲れ」と「ねむ氣」を克服する鬪爭の生活だと理解される部面のあることを見逃してはならない。これが仕事場に休息の必要なる理由である。

終日、一定のリズムを以つて上下する幾千幾萬の紡績工場の紡絲機、その廻轉に伴ふて起る單調な、且つ一律な、低調な音響、人工的に濕氣を帶ばされてゐる、工場内の濕りけの多いなまぬるい空氣、私はそこで屢々、私の研究を行つたのであるが、今それを思ひ出して見ても、睡氣を感ずるほどである。睡眠に對する條件としては、昔の紡絲工場は誠に好適のものである。かかる睡眠を催

す條件下の作業は、「疲れ」てゐなくても、睡くなるのである。「睡くなる」條件に對しては、作業者は、意志力を以つて、これと鬪ひ、これに打ち勝つて、生産をあげてゆかねばならない。ここに意志的努力の必要があり、意志的緊張は生産的活動の原動力となるのである。近代の生産的活動が、筋的作業としてよりも、精神物理的な活動として、より多く理解されねばならないといふ理由は、ここにも實證されるのである。この意志的緊張を消退せしめることが當面の休息の必要であるが、睡氣を催す工場環境條件を排除して、生新なる別天地を與へ、作業能力を潑剌化することも亦、勿論休養の意義である。而もそれは一齊に、集團的に休憩時間を與へると云ふ方法だけを考慮せず、個々の勞務者に、極く短時間——例へば三分、五分といふやうな短時間の休憩を與へ、ねむ氣の條件から脱せしめて、心氣を一轉せしめることを考慮してよいのである。これは紡績工場や人絹繰絲場の作業者には勿論のこと、凡ての分化され、專門

化された、そしてそのために、作業の單調化によつて、意志的緊張を必要とし、「ねむ氣」を催す條件を工場内に造り出してゐる、作業場には、極めて重要な休息の方法であると思ふ。

併し一日の勤勞によつて起る「疲れ」と「眠り」を慰やす、最も自然で、且つ最も生理的な手段は「十分に眠り足る」ことである。これより外に方法はない。これが最善の休息であり、疲勞回復の方法である。

蓋し一日の勤勞に關與したる中樞神經系並に筋神經組織は、その組織内部に上述したやうな物理化學的變化が起り、これが「ねむ氣」を催し、疲勞感を起すのであるから、この體内に起つた「疲れ」の原因——組織内部に起つた物理化學的變化が反轉して「ねむ氣」を去らしめ、「疲れ」を解消する生理的狀態が身體内部に再生されねばならない。さうでなくては「疲れ」の感情は癒され

ず、「ねむ氣」は去らない。

十分に眠つた後には、中樞神經系中に、よく調整された、且つ强力な昂奮が發起するのである。これが生新なる生命活動——自覺を再びよびさまして來るのである。ここに更新され、再生された健全なる生理的狀態がとりもどされる。これに基づいて潑剌たる生産意志が生れるのである。よく眠り足ること、よく眠り足ることによる勞働意志の再生と、勞働力の再建とが、いかに必要缺くべからざるものであるかを、人々は認識しなくてはならぬ。

疲勞のために仕事をなげやりにし、その日常生活に於ける身邊のことすらも放棄して、自墮落になつた人や、或は疲勞のために仕事に對して全く興味を失くしてゐながら、ただ單に勞働時間を賃銀にひかれて働いてゐた人でも、よき眠をとつた、一夜の快眠によつて眠り足りたる翌朝には、仕事に悦びをもち希

望をもち、興味を覺へて、再び熱心に仕事にかかることが出來る。

勞務者に對する精神訓練の必要なことは私も十分にこれを認める。併しその精神訓練は「疲れた」狀態に對して行はれては效果はない。先づ覺醒——潑剌たる生命活動、よくねむり足り、よく休養が足りて、心身ともに極めて爽快な、自然な、生理的狀態にあらしめることが、實は精神の訓練そのものの基本的問題なのである。この重大な事實を人々は見逃してゐる。これは常識でなくして科學的實證を經た科學的認識なのだ。以つて萬人が嚴守すべく、時局下の勤勞者全部に實踐せらるべき生活の根本的な指導精神なのだ。

疲勞を癒し、疲れの感情を回復するためには、よき睡眠こそ最善の手段であると、私は云つたのであるが、然らば「ねむる」ことそれ自身に、疲勞の回復、覺醒の働きがあるのであるか。即ち、眠つて休養をとり、且つその間に勤勞に

よつて消費されたる力源——榮養を補給し、蓄積することによつて、勞働力を養ふといふだけでは、疲勞の回復にもならず、また覺醒——即ち生新にして潑剌たる生命活動をなし得る狀態の再生を意味するのでもない。睡眠には、何か外にまだ重要な作用があるのではないかと思はれる。

睡眠と疲勞と力源の再生と、生新潑剌たる生命ある人格活動の四つの關係は、實に不可思議な生活の斷相を吾々に物語るものである。

註　例へば費ひ果された蓄電池の蓄電に際して、ただこれに酸と鉛板とを與へることだけでは電氣的エネルギーは蓄積されない。丁度それは力源の補給のために休養と榮養とを與へても生命活動が起らないと同樣である。そこには必ず酸から鉛への電流に基づいたイオンの移動が起ると同樣に、睡眠の疲勞回復及び生命の潑剌化には、血液から筋神經組織へのイオンの移動があるのと同樣である。

遺憾千萬なことではあるが、上記のやうな睡眠によつて起るイオンの移動に原因する、生命活動の潑剌化と回復との過程は、相當に長い時間を必要とし、

急速に、短時間には成就しないことである。それは蓄電池の電氣的エネルギーの充足に長い時間を必要とすると同樣である。從つて疲勞の感情の眞の回復には長い時間をかける必要がある。よく十分にねむることによつて靜的エネルギーの再生を意圖すべきである。

註　蓄電機は放電を再び充電に反轉せしめることが出來る。これと同樣に、後部漏斗狀部に存在する睡眠制動中樞は筋神經組織に於けるエネルギー消費を制御して、他方これに靜的エネルギーを蓄積せしめると云ふ反轉作用をいとなむとされてゐる。

睡眠とともに交感神經のトーヌスが低下し、迷走神經のトーヌスが高まるのであるが、生活體系に於ける、かくの如き相對應する二つの作用が、果して血液から筋神經組織へのイオンの移動によつて起されるのであるか、どうかは未だ明白にされてゐない。多分眠ると云ふ現象及び醒めてゐるといふ現象は、血液と筋神經組織との間の陰イオンの交流によるのみならず、尙吾々の知つてゐ

ない物理化學的生物學的過程がこれに關與してゐるのだらうと想像されてゐるに過ぎない。

註　一　急性傳染病初期に於ては、非常にねむく、だるいことがある。流行性感冒の初期などに人々がよく經驗することである。この時期にはまた勤勞をいとひ、勞働意志がなくなる。これらの病人が何故に勤勞をいとひ、臥床安靜を欲するのであるか、これも研究問題の一つである。

二　病原體から出る毒性生成物による中毒狀態であるのか。急性傳染病は筋神經系に對して疲勞の如く作用するのであるか。

三　熱のために潛在エネルギーの大量の消費が體內に起るのであるか。

四　或は血液中のカルチューム含有量が高まりこれが疲勞した場合の如き現象を起すのであるか。

眠る時間の長いといふ點では、乳兒や幼兒は注目される對象である。九時間十時間はおろか、十二—三時間も平氣で快眠をむさぼることを人は知つてゐる。これは彼等の生活活動による疲勞に原因するとの考へは、今日成立してゐない。乳幼兒に長い睡眠時間の必要なのは筋神經系の緊張力の大なるためによるので

はなく、むしろ身體の發育慾求のためだと考へられてゐる。ここにも少青年勞務者と睡眠の問題が頭をのぞけてゐる。

次に注意すべきは「容易に疲勞し易き體質」がある。若しかかる素質をもつた人間があるとすれば、作業との關聯に於て、重大視され、特別の注意のもとに、適當な處理——採用と管理とがとられねばならない。

第一に問題になるのは虛弱體質である。今日までの吾々の體驗によると、所謂虛弱長身者や精神的虛弱者などは、極めて疲勞し易いものである。これらの人々は仕事に於て、仕事場に於て、常に仲間はずれになつてゐるのである。これらの人々は極く僅かの疲勞にも、直ちに全身の疲勞感を起すのであるか、或はそんな主觀的な問題ではなくして、實際に於て、彼等は疲勞の生理的狀態の原因、卽ち疲勞狀態としての物理化學的現象に、常に高度に、且つ速かに達するような素質をもつてゐるのであるか、これに關しては、まだ何等の科學的實

證が與へられてはゐない。

併し事實として、虛弱體質の人は早く疲勞し、而も仕事に際して、頑健な人よりも、より多くの眠りを要求する。またかかる性格の人に限つて、往々よき眠りをもたない。眠入りぎわの惡い人で、すぐに眼をさまし、快眠がとれない人であることは確かである。而もかかる人は常に休養を欲し、休養の不足を訴へる。かかる種類の人は筋肉的な仕事をする人には極めて少いが、輕作業や、事務所で働く事務員、會社員などには相當に多いのである。

「疲れ」を克服すること卽ち、心身の活動力を再生するためには、ただ心身を安靜にし、休息すればそれで得られるかと云へば、決してさうではない。生理學の書物には、動物は食料の不足よりも、眠らせないやうにすれば、早く殪れることが指摘されてゐる。人間でも眠りが不足すると、翌日の活動能力は低

下する。

よき、且つ十分なる快眠は誠に疲勞回復の最善の方法であることは、以上の論述で十分に理解されたと思ふ。

戰時下では、ここに述べた疲勞と休息と睡眠との關係ほど、大切なことはない。勞務者に快眠を與へよ、といふことは、生產力の擴充の基本問題である。そこには仕事自體に對する勞務者の希望が湧いて出なくてはならない。明日の勤勞への勇躍する生氣潑剌たる勞働意志が關係してゐる。また住居、榮養、休憩時間など、勞働それ自身、勞働環境など、勞務者の生活に於ける全面的な要素が、この問題にからみ合つてゐるのである。これらを一々克服し整調しなくては、よき休養としての、よき休眠は解決し難いのである。

かかる本質的な方面へ考慮を拂はず、ただ快眠さへ與ふればよいといふ目的のために、醫藥が往々にして用ひられて來たのである。醫藥によつて果して眞の休養がとられるか。

註 一 カフェーンの投與は疲勞を暫時堪へしめ、睡眠を追ひのける。カフェーンは大腦の中樞神經細胞を昂奮せしめる。

二 心臟機能や腎臟機能などはカフェーンで高まる。併しこの作用は一過性である。深いねむりの如き休養回復、再生の作用はない。

三 Emden やその他多くの人々は、燐の投與によつて作業能力を高め、疲勞を回復せんと試みた。彼は燐酸曹達を推賞する。多少の效果はあるとの報告はあるが、反對の報告もある。

四 動物に睡眠劑を投與すると、若し本當に睡眠狀態に入つた時には、血液中のカルシューム水準が低下する。併しここに注意すべきことはかかるイオンの移動を起す原因は血液中に睡眠劑が存在するためではなくして、睡眠狀態そのものが原因である (Cloetha)。即ち、睡眠狀態が血液中のカルシューム含有量の低下の原因である。

五 Demole によると動物實驗と同樣に、健康な人間でも、生理的睡眠の場合には血液中のカル

シューム水準が低下する。

然らば襲ひ來る疲勞を克服し、心身の疲勞したる人に、必要なる休養と再生とを與へるためには、生新潑剌たる生命力を再生する快眠より外に方法はないと云ふことになる。而してこの快眠を與へるためには所謂條件反射をもたらすために、ねむたくなるに必要なる條件を整へねばならない。それがためには、藥を與へるといふやうな、凡ての人意的な工作よりも、勞務者がその仕事に正しく從事し、その生理的、心理的な性能の自然性をよく用ひ、よく活用し、またその作業と勤勞とに精勵することは勿論、その作業と生活とに希望をもち、明日の人生への志を高め、日々新たなる潑剌たる生命力を再生して行くことが根本的に必要である。

その生命力——人格的活動の再生には、一日の勤勞の後に來るところの當然の疲勞と疲勞感の克服のために、よき十分なる眠りが與へられねばならない。

一日の勞働時間の長さに對應し、また作業の强度に對應する適當な長さを有する休憩時間の配置や、休日、休暇にも、十分に考慮されねばならぬ事項ではあるが、それよりも先づ、先決問題として、休息と疲勞回復の最善の手段としての、一夜の快眠が得られねばならぬ。この基礎の上にこそ、休憩時間や休日の活用とその價値とは滿喫し得られるのである。

勞働と娯樂

一、生活に於ける樂しみの問題

娯樂は人間の生活のなかに醸成されるものである。生活の内部からかもし出される樂しみが本當の娯樂なのである。道の中に樂しみがあるのである。道は人生である。向上する人生、生々發展する人生の中に樂しみがあるのである。

娯樂は元來、人の生活の外から與へられ、生活の外に求めらるべきものではない。娯樂は内に求め、心の中に生れ、生活の中に成長するものなのである。娯樂への欲求は、心のなかに樂しみの缺乏してゐるによるのである。生活の内部の樂しみの貧困が、娯樂を求むる心の動きを決定するのである。勞務者の娯樂

といへば、人はただちにそれを外部から、即ち彼等の生活の外からこれを與へようとする。映畫、音樂、スポーツ、ハイキング等、勞務者は常にこれらの外から與へられる娯樂の中にゐるのである。與へられるもの必ずしも多くはなく、豐かでもない。併し與へようとする意圖は相當に强く、また與へられねばならぬといふ要求は、勞務者諸君の側からも、相當に强いのである。「吾等に清新なる娯樂を與へよ」とは、農村の住民から、工場の勞務者から起る痛切な叫びである。正しい、よい娯樂を全勤勞層の人々に普ねからしめることは、勤勞文化向上、生産力の擴充の基本的方途の一つであるとは、多くの勞務管理者、農村問題の關係者たちの絶えざる要求をなして今日に及んでゐるのである。

この要求は、漸次に、滿たされようとしてゐる。併しこの滿されて行く要求の下にあつて、果して農民と勞務者たちは、その心の樂しさの貧困と、その生活の空漠とを滿たし得てゐるであらうか。また將來に於て、それが滿足され得

るであらうか、私はむしろ滿されざる要求が、更に一層に强められるのではなからうかをおそれてゐるのである。

二、勞働のなかの樂しみ

私はかつて、私の主宰する農業勞働調査所に於て、ある夏の夕、農村青年の有志と、農村の娯樂について語り合つたことがある。その席に集つてゐた約三十名の青年たちは、みんな農村生活のさむしさと憂鬱について訴へてゐたのである。青年達の語るところから察するに、彼等は彼等の生活を導く光と力とを渇望してゐるのである。生活の中に光明が見出せないのである。彼等の生活をぐんぐんと引つぱり上げてくれる力がほしいのである。一言にしていへば、彼等は彼等の生活と人生とを向上させるための指導力にうゑてゐるのである。

ところがその席で、一人の青年が最後に口を切つたのであつた。「私にはみんなが求めてゐるやうな娯樂はいらない。從つて今、問題になつてゐるやうな

種々の娯樂は、これをもつことには敢へて反對ではないが、それらの娯樂よりももつと大切なものが、農業の中にあると思ふ。凡そすべての職業の中で、農業ほどたのしみなものはない。耕種の撰定から、播種、育成、施肥、收穫と云ふ、一聯の農業の仕事の中に、天地造化の妙味が味はれ、人事を盡して天命を知るの悅びがある。私は農業の中に、人の生活の、百姓の生活の樂しみと悅びとをもち、それに滿足し、私の人生を向上させることの出來るのを仕合せとする」といふのである。

また私はある工場青年勞務者の懇談會に出席した折に、一人の青年から、工場の生活に於て、彼の人生の行路をはばみ、彼の向上の志をついばむ、あらゆる障碍と闘ひつつ、彼の人生の向上のために、滿腔の希望に燃えて、職場でみつちりと苦勞をしてゐるといふ告白をきいた。彼はそれを語る時、全く光明の

中を歩み、今こそ、彼が人生に出立したといふ、たのしさと悅びとに勇躍してゐる樣子であつた。私はその青年の態度にいたく感動したのである。

最近にも私はある炭鑛で、二三十名の採炭夫諸君と懇談する機會をもつた。それらの人達は、日々、地下二千尺の恐ろしく條件の惡い炭層の切羽で、炭塵にまみれて勞働に從ふ人達である。みんな素朴で、素直で、親しみのある性格のもち主である。私の主宰の會合であつたので、みんな心まちに私を待つてゐてくれたのである。待ちつ、待たれる人の集りは、和ごやかでよいものである。私は話しを切り出した。「炭山の仕事は地上の仕事に比してつらい、骨が折れる仕事だ。よくやつて下さる。有難い。併し炭山では勞務者の出勤率が極めて惡い。地上の工場では、多くの場合九〇%以上の出勤率がある。最惡の場合でも八〇%を下らない。然るに炭山では七〇%、時によると六五%にも下るので

ある。仕事がつらいためだとは思ふが、ただそればかりでもないやうな氣がする。仕事に比べて體力が足りないから、つめて働くことが出來ず、缺勤者が續出するのであらうか。この時局重大の折柄、仕事を休み、仕事場に缺勤者が多く出ることは、誠に遺憾の極みである。その原因をきはめ、その原因を排除して缺勤者をなからしめるやうにしようではないか。」

この問に應じて、一ときの間、採炭夫諸君の間から、いろいろな意見がもち出された。體力の足りない、弱い人間が增加したことについても、皆の意見は一致してゐたのである。その時、私は

「併し諸君、缺勤者の多い原因は、あながち、體力だけの問題でもなからうと思ふがどうだ。」誰か一人の採炭夫君が、この私の聲に應ずるやうに、

「いや全く體力だけではないだらう」といつた。

「それならその他の原因といふのは何だ」と訊ねると、

「精神力が足りない。働らかうといふ精神がないからだ。體重が十三貫目位しかなく、あんな人間には、地下勞働は勤らないだらうと思つて見てゐると、さうではない。毎日みつちり働きぬく人間がゐる。仲間つき合ひもいい。義理もかかさない。女房、子供もなり振りがよい。そして滿勤（炭山の專用語で缺勤なしの勤めぶりの意味）する。これなどは體力でないね。全く精神力だ。」

衆の中から賛同の聲があがるのを私はきいた。純朴そのものといふべき採炭夫の口から、私は精神力といふ言葉をなげつけられ、人間の仲間の倫理と、仕事場の勤勞の性格とが不二のものとして、一人の採炭夫に共存してゐるといふ實證をきかされ、その家庭生活に節度のあることをきいたのである。私はここに集つた人に、頭を下げた。わが師、わが先行者を私は採炭夫諸君の中に發見した。「わが同志よ」と私は叫んだ。彼等は早くもう一度會ふ機會をもちたい、待つてゐるといつた。私もまた近いうちに必ずあひたいと約束して別れたので

ある。

これらの勤勞する人達によつて述べられたところは、みな「人生を向上する」ことのたのしみと悦びとである。向上する人生を、職場に體得しつつある人の、生活の態度であると私は思ふ。孔子は「樂んで以て憂を忘る」と論語の中に述べてゐる。人生に樂しみを見出せば、凡ての憂が忘れ得られることを意味するものである。産業前線に於て、生産的活動に從事してゐる、これらの人達の話の内容は、全く、孔子のいふところと一致してゐる。彼等はその業と生活とに於て發奮してゐるのである。志を立てて、業に服し、業の中に樂しみを得、凡ての憂を忘れてゐるのである。かくして彼等はこの悦びに培はれて、その人生を向上してゐるのである。

生活の中に樂しさを見出すには、人がその人生の向上につとめてゐるときなのである。仕事に於てはげみ、そのはげみによつて、人生を體得してゆくのである。本當の生活の悅びはここにあるのである。何物にもかへがたい、また何物にもおさへられない、凡ての人生の憂と悲しみを克服することの出來る、あらゆる人生の行路の苦難にたへて、人生を向上する志を鼓舞する、それが人の求めて已まない樂しさである。何人も、この樂しさを求めて、人生を旅すべきであらう。

更に一層の高樓に登るといふ言葉がある。この言葉は、人生の向上の樂しさと悅びとをいひあらはしたものである。人生の行路に悅びを求めることは、丁度、富士山を登るやうなものである。下界にゐる間は、僅かの小さな展望をもち得るに過ぎない。いろいろの障碍物のために視界は極めて狹い。一合目、二合目と、高さに登るに從つて展望が開けて來る。今まで物にさへぎられて見え

なかつた景觀が、次第に、眼の前にあらはれて來る。一層に高さに登るにつれて、視界は益々擴まつて來る。見えなかつた下界がだんだんに見えて來る。駿河、三河、伊豆、關東、さては中部の國々と、その平野をめぐる諸岳を、吾々は指呼の間に見ることの悅びにあふれる。更に、人は見渡す限り渺茫たる太平洋の波濤を見、或ひは雲表にそびゆる頂上に立つて、天地の間を覆ふところの雲海の涯に、さし昇る太陽に、眼をみはるのである。

人生の向上は、恰かも、高き山に登る人が、ひらけゆく展望をもつに似てゐる。人はその人生を向上するにつれて、その心眼が啓らかれる。みえなかつたものがみられ、感得し得なかつたものを人は感得し、彼は正しくものを觀、正しくものを了得し、正しくものを判斷し、正しく、且つ自然に行動する人となる。從つて彼の知性は深まり、彼の行動には德性が加はる。その人の人生が向上するからである。ここに人生の樂しさ、人生の悅びの源泉がある。この源泉

を汲みとることが、人の生活の目標である。私が娯樂は外からつけ加へらるべきものではなく、人の生活の中、心の中に探し求めらるべきものであるといふのは、ここに述べたやうな意味合ひである。

三、近代的勞働の本質

仕事の中に悅びをもち、生活の中に樂しさを見出すことは、今日のやうに分化し、單純化した工業技術の中に勤勞してゐる勞務者の生活では、極めてむづかしいことである。君のいふことは一片の理想に過ぎない。現實はそれを不可能ならしめてゐるではないか。この反對論は誠に尤もなことで、私にもよく了解することが出來る。

今日のやうに專門化し、分業化した生產技術の下では、人の仕事は單なる機械的な働きに過ぎない。仕事は單純になり、單調になつた。まことに一擧手一

投足の仕事になつて了つた。心をこめて、丹念に働かうにも、働きやうがないではないか、一定の大さの、一定の形をした鐵片に、穿孔機をもつて、一定の孔をあける單一な作業を、一日何千回と繰り返へす仕事のどこに樂しみがあるのか、またどうすれば、その單調極まる作業の中に悅びをもち得るのであるか。

一人の婦人勞務者は、今日では二十臺、時としては四十臺もの自働織機を管理してゐる。織布工場の中は、シャットルの往來する烈しい音響と、織機の運轉のために起る騷音のために、耳も聾せんばかりである。そのただ中に立ちつくして、機械の調子に耳をそばだて、絲切れを發見するために絕えず注意の緊張を怠つてはならない。仕事は苦痛である。仕事に追ひまくられる。仕事が終るとホッとする。仕事の中には樂しみはない。仕事が終つてから、心に求めるものを思ふ存分に求めさがすよりほかに、生活の悅びはあり得ないではないか。

製鐵工場を見學したことのある人は、原鑛が熔鑛爐の中で、灼熱せられ、ド

ロドロの湯になつて爐口から流出する。それを四十噸、六十噸といふやうな大きな鐵製の容器にうけ入れ、これをクレーンで引つかけて運び、型に流し込む、げにも壯大、勇壯な、肉躍り血湧く仕事であるが、同時に危險極まる仕事である。それを案外平氣にやつてのけてゐるが、實際には、工人は全身全力をあげて、緊張以つて仕事に當つてゐる作業振りを見たことであらう。仕事場は冬でも攝氏三十度、眞夏では攝氏五十度の高溫に上るのである。この高溫によく堪へ、危險極まる作業をくる日もくる日も繰り返す、その仕事のどこに樂しさがあるかといふのであるか。

また一つが三十封度もあらうといふやうな、灼熱した鐵片を、一米もの長さのある鋏でつかみ、これを六百度に熱せられてゐる大きな廻轉するロールにあてがつて、壓延し、鐵の薄板を作る仕事がある。重量の重い、高熱體を取扱ふ作業である。私の見た中では、最も激しい筋肉勞働である。やはりその仕事場

は攝氏五十度にも上るのである。うつかりしてゐると、熱體に觸れて生命をなくする危險がある。夏季には熱中症のために倒れる人も稀ではない。凡そ苦痛な激働である。たのしみも、悅びもありはしない。ただ無心に、夢中に、全力をあげて仕事に追ひかけられて働いてゐるだけであるではないか。

また炭山の勞働を見よ、そこには日光はない。地下二千尺もの仕事場もある。地熱のために、その空氣は攝氏三十度を超へてゐる。發破をかけて、炭層を破壞する音が、遠雷のやうに、二六時中氣味惡く響いてゐる。光といへば、帽子につけられた安全ランプの弱い光だ。仕事場は狹い。天井から落磐があるかもしれない。氣をゆるせない。みんなの顏に汗がつたはり流れてゐる。その顏に炭粉がついて、黑い顏の中から眼が光り、唇から白い齒が時々に露出する。一見凄愴な光景である。この勞働のどこに悅びがあるのであるか。

以上私は、今日の人間の仕事場の仕事の狀況の二三をひろひ上げて、その仕事の遣り方や勤勞の行はれる狀態を瞥見したのである。一見しては、仕事の中に悅びを見出すことはいかにも不可能である。かかる仕事を通じて、人生を向上しようとすることは、木によつて魚を求むるに等しいと、人は考へるに相違ない。

然るにもかかはらず、事實はさうでない。多數の勞務者の中には、かかる仕事場の仕事を通じてさへ、その人生を向上してゐるのである。苦痛を克服し、難きに堪へ、幾難關を突破して、不斷の努力と勉勵とによつて、常に一層の高樓に登つてゐる人がゐるのである。樂んで業に服し、業の中に悅びをもち、倦むところを知らないといふ生活者がゐるのである。

業の中に樂しみがあり、業に於て悅びをもつとは、機械生產技術以前のことだと片づけて了ふわけには行かないのである。分業化し、專門化し、單調化し、

以前には思ひもよらなかつたやうな過酷な勞働條件が、近代の生產技術によつて出現したのではあるが、そのやうな條件下に於てでさへも、業の中に樂しみを見出し、業に於て悅びをもち得てゐる人があるのである。さう云ふ人に於ては、業に服する生活に於て、絕えずその人生が向上してゐるのである。勞働はその人にとつては人格活動なのである。而もこの人にとつては、仕事に勉勵することが樂しみであり、人とともに勤めはげむことが悅びである。一つの苦難を越えることは一つの悅びであり、二つの難關の突破は、人生の二つの悅びなのである。單調な仕事も、激勞働も、かくてこの人にとつては、克服し、ふみ越えらるべき、生活の中の一事件に過ぎないのである。彼等はかくして一つ一つの苦難を克服して、自らの適性を高め、新たなる生活を築いてゆくのである。

併しかくの如きは、決して萬人に望まるべきではない。それは全體としては、ただ少數の志の厚い人の生活にのみ體得されるところである。ここに外部から、

即ち國家の力により、社會的な手段により、或ひは公私團體の力によつて、外部からの娯樂を與へる必要が起つて來るのである。

四　現代工業技術の科學的精度と倫理性

外から與へられる娯樂について、時として、人々は大いなる考へ違ひをしてゐることがある。仕事には樂しみもなく、悅びもない。悅びと樂しみとは、仕事の外に求むべきものである。仕事に於ける愉悅の貧困さを、仕事の外の樂しさをもつて補ふのであると考へてゐる人がある。この考へ方は、丁度、勞働は賃銀のための時間であつて、そこには人生はないのだ。パンのみがそこにある。眞の人間としての生活は、勞働時間以外の時間にあるといふ考へと相通じてゐる。從つて賃銀のための時間は出來る限りこれを短縮し、人間らしい生活の時間を出來るだけ長くしなくてはならぬと主張された時代があつたのであるが、今日、勞務者に娯樂を與へよといふ主張の中にも、時とすると、さういふ思想

がないではないと思ふ。

賃銀のための勞働の時間と、樂しみのための生活の時間の二つがあるのではない。勞働時間も、休息・休養の時間も、一人の人にとつては、どちらも生活の時間であり、どちらも、その人にとつてはかけがへのない人生の行路なのである。勞働の時間、勞働の生活の中にも、人は自らを啓發し、人生を向上するのである。また、休養の時間にも、人は勞働に備へ仕事を反省し、仕事のためにその心身を養ひ、以てその人生を向上するのである。

今日の産業技術は、從前に比較して、驚くばかり科學化されてゐる。且つその技術は科學的な意味で、極めて精度の高いものになつてゐる。のみならず、その工程は組織化されて來てゐるのである。今日では昨日の未熟練者が、數日數週の練習によつて、驚くべき正確度の高い、科學的規格をもつた優秀なる製

品を造り上げることが出來るのである。嘗つては、十年、二十年の熟練と努力とによつて、始めて到達することの出來た技術が、今日では人間の知能の發達と、科學と技術との進歩によつて、數日、數週、數ヶ月にしてこれを完成することが出來る。

また一臺の自動車は約四千の相異なる工程を經て造りあげられるが、その一々の相異なる工程には、各々相異なる勞務者が配置されて、常に一貫した、組織的な、秩序正しき作業が、順序よく進行する。個人々々の作業はいかにも單純で單調ではあるが、生產組織全體の作業系列は、極めて組織的に組み立てられ、數千の勞務者が、全體として、一つの生產目的のために、活潑な有機的な活動を行つてゐるのである。人間は動力を驅使し、工程を支配し、機械を統御し、且つ數千の勞務者の個々別々の生產活動が、有機的に堅く結束せられて、生產目的に向つて、打つて一丸となつて、一臺の自動車の完成に向つて動員せ

られてゐる。そこには科學的精度に基づく工作の妙用と、生產組織全體を貫ぬく人間の協力のすばらしい發揚が見られる。卽ち現代の分化し、單純化したる作業に於て、業の中にたのしみを見出すためには、人は先づ、今日の作業の基礎をなしてゐる科學と、その科學が技術に與へてゐる精度について、彼の關心を深め、技術のもつ精度と組織とに心をよせることによつて、科學的に思惟し行動する人にならねばならない。

また今日の生產事業場の中では、人は單に自分一個の作業をのみ考へ、それを了解するだけでは、十分に仕事を理解したとはいひ得ない。彼は彼自身の作業の前と後とに相聯接し、彼の作業に密接に關係してゐる、彼の同僚の作業をよく理解することに努力しなくてはならない。卽ち彼は個々の分化され、單一化された作業が、科學的精度によつて、かくも緊密に、正確に、相結ばれ、企畫せられて、進行する工程に、その眼をそそがねばならない。

かくて彼は、作業と工場生活とを通じて、その仕事場に於てなされてゐる全工程と、その作業とを、漸次に彼の心の中に收めとらねばならない。この科學的技術と科學的組織についての理解が擴められ、深められるに從つて、始めて彼は彼の分擔してゐる、そして彼にとつては、誠に單純で、無味乾燥な部分的作業が、その全工程に對する地位を知り、彼の作業の重要性を自覺することが出來るであらう。

かくて彼は最早、專門工作機械をあてがはれて、機械のやうに仕事をし、ただ手足を機械的に勞して、部分品を作製する勞務者ではなくなるのである。彼は科學的技術者たるを自覺し、科學的精度を把持して、全體に協同する一員たることを自認し、彼の分擔する部分作業を通じて、全工程の作業に科學的精度を以つて關與し、仕事場全體の凡ての作業に對して責任を感じ、その仕事の精度と、その責任とに於て、彼はその仕事場の全同僚と、倫理的に相結ばれる。

ここに分化し、專門化したる工作作業に於ける新たなる倫理觀が彼をとらへる。この倫理觀こそ、彼が彼の同僚とその心意氣を一つにし、且つ互に堅く結ばれるに至る原動力をなすものである。彼はここに彼の同僚を心から愛惜する人となる。彼は、また彼の同僚を勸勵し、ともに人生の向上を願ふ同志の人となる。彼は、かくて、單調、單純な部分作業の集合の仕事場にゐるのではあるが、彼にとつては、その仕事場は科學と技術との敎ゆる物の正しさと、物に備はる自然さと、秩序とを學びとる敎室となり、同志の愛惜と勸勵とによつて、相互の人生を向上する道場となるのである。ここに人格としての勤勞觀が確立せられ、そこに生產の凱歌が高唱せられ、業の中、道の中に、彼は樂しみを發見し得て、あらゆる苦難と峻嶮とをのりこへて、人生の向上に邁進する勇氣を鼓舞されるのである。

五、外から與へられる娯樂

勤勞する人は、自らの努力によつて、自らの生活の中に、樂しさを發見することをつとむべきである。それが道に歩む人の心境であると私は思ふ。「汝、若し、曠野に行き暮れて、道に迷ひ、燈光を見失ふことありとも、決して嘆き悲しまざれ、汝は汝の胸より、汝の肋骨の一本を切り出して、それに點火して進め」といふのは、東洋の一聖者の修業の心構へであつたのである。私は私の青年時代に於て、この言葉をきき、幾度かこの言によつて、私に迫り來つた幾多の難路を踏破することが出來たのである。併し私は、私の人生の行路に於て、幾多の外部から、私になげ與へられたものが、いかに私を樂しませ、私を導びき私を力づけるに役立つたかを追想せざるを得ないものである。

私は嚴寒に白皚々たる雪の高原に、スキーを試みた數年間の快味をいまだに想ひ起してゐる。私は日記にかうかいてゐる。

……この雪原に立つて、正に暮れようとする夕陽が、山々の雪に輝き渡つて、五彩の光を發する靜寂のうちに、友とスキーをかざして語つた情景を未だに忘れ得ない。

……スポーツとしてのスキーは、大自然の崇高と靜寂のうちに行はれるところに、一段の快味がある。庭球や野球は、いはば市井のうちのものである。スキーに至つては、自らその趣きを異にする。

……スキーが市井のものではなく、大自然の中のものであるといふ意味は、同時に又、スキーは簡易中庸の生活への訓練を與へるものであるといふ意に通ずる。凡ての世間的系累と煩雜と虛飾とは、スキーヤァの生活には全々不用のものである。あり合せのものを食ひ、あり合せの暖をとり、めぐり合はせた恩澤に滿足して、自然を樂しむことの出來るのも、誠にスキーヤァにして感得せられることなのである。

ここに私はスポーツとしてのスキーを引き出して來たのであるが、かくの如き、外から與へられるものから享ける生活の樂しさは、讀書からも、工藝や美術からも、音樂からもこれを享けることが出來る。またこれを、自然を愛し、自然の景觀を慕ふて旅する旅人の生活の中にも發見することが出來るのである。

眞實を求め、美しいもの、善なるものを求むる心に、凡ての外部的なものが享け入れられたときに、そこに人生の向上を促す力としての、娯樂が存在するのであると思ふ。即ち自らの生活の中に生活の悅びを見出さうとする努力の究極に於て、外部的なる娯樂がその人の心の中のものとなり、生活の中のものとなるのである。

かくの如く、自らの努力によつて、自らの生活の中、道の中に、樂しみを見出さうとつとめる人のために、その志を助け、その志を勵ますために、外部的なる娯樂が、豐かに與へられなくてはならないのである。人の志を育て、志を

伸ばし、志を遂げしめるために、娯樂は、人間の生活に必要なものである。從つて事業主は、その勞務者の志を援けるために、また社會と國家とは、國民の志を遂げしめるために、懇切な、豐かな娯樂施設をもつ必要が存するのである。かかる意味での娯樂は、人の人生を向上するものであるから、それは正しく、その人の勤勞のねうちを本質的に高め、その生產的活動の質を向上させる力をもつてゐるのである。

これに反して、外部から與へられる娯樂が、その人の人生の向上を促さないのみではなく、往々にして、その勤勞の質を低下し、その生活をも蝕ばみ、從つてはその人の生產性をも低下するといふやうな事實にも、決して乏しくはないのであるが、かくては娯樂は一種の生命の浪費にしか値しないことになるのである。かくの如きは究極するところ、娯樂を享ける人に志がないからである。道に歩まうとする志に缺くるところがあるからである。

六、勞働と音樂

わが邦の工場には、漸く音樂を樂しむ傾向が生れ出してゐる。ブラスバンドが出來てゐるところがある。鼓笛隊がつくられてゐる工場がある。合唱隊が出來てゐる。併しそれらはまだ、勞務者の生活の中のものになり切つてはゐないやうである。何となく生活とぴつたりしてゐないのである。

私はドイツにゐる間に、多くの工場を見學した。ある製藥工場を視察した際のことであつた。作業場を順次に廻りあるいて、私は藥品の包裝部に入つた。そこには二三百人の婦人勞務者が作業してゐたのである。みんな一生懸命に仕事をしてゐる。作業場は實によく整頓され、明るく、而も清掃されてゐたのである。その中で作業は驚くべく順調に、整然として進行してゐたのである。私は無心に、快調に進行する作業にみとれてゐたのである。

折しも、誰が號令したのでもなかつたのであるが、作業者の中から、私の聞

き覺えのある獨逸民謠の一句が歌ひ出された。自然に流露したといふやうな歌ひ出しである。やがて、これに續いて一人加はり、二人加はり、合唱は次第に多人數に擴がつて行つたのである。作業はやはり快調に進んでゐる。歌のリズムは完全に作業と合致し、手の働きをそれにのせてゐるのを私は見逃さなかつたのである。彼女等は彼女等が、いま作業をしてゐることを忘れ、歌つてゐることをも忘れてゐるかのやうに見えたのである。

合唱は高調に達したと見えたのである。がそれも全くつかの間のことであつた。合唱は次第に小さくなり、三人の聲、二人の聲を私はきいた。そして最後に私は一人の聲をきいて、合唱は遂に作業場からその聲を消して了つたのである。その後には、彼女等の包裝する低い、併し、今、彼女等が合唱し、今私がきいたと同じリズムをもつ音がそこに殘り、仕事場に響くのを私はきいたのである。

よき詩をもち、よき音樂を豐かにもつ國民は幸福であると、私はしみじみ感

じたのである。その詩とその音樂とが、その婦人勞務者の生活の中に、教養として攝めとられてゐることに、更に一層のうらやましさを禁じ得なかつたのである。

吾々はよき詩をもたないのではない。萬葉集をもち、古今集をもち、金槐集をもつてゐる。ただこれらは、勞務者のものになつてゐないだけのことである。國民のもつてゐる文化が、勤勞層に浸透してゐないだけのことである。この詩、この詩の心は、何とかして、巷に勤勞する大衆の教養として、その生活をうるほし、これを豐かにしなくてはならぬと思ふ。

七、最高の國民的文化を與へよ

勞務者の要求してゐる娯樂は、時としては出版物であり、音樂であり、スポーツであり、彼等を慰安するものであらう。娯樂に對する要求は千差萬別であるに相違ない。併し彼等をして娯樂の必要を叫ばしめ、娯樂を求めしめ

る根本のものは、決して個々の片々たる娯樂ではないのである。彼等の求めて已まないものは、彼等の人生を向上する力をもつたもの、即ち彼等の生活に於ける文化の一層の高揚であると私は思ふ。

今日の勤勞層は、多くの點に於て、文化的教養に惠まれてゐないのである。二千六百年の歴史を通じて、わが國民生活の中に築き上げられて來た、文化の香氣は、未だわが勤勞層に浸透してはゐないのである。彼等は科學と技術との環境の中に、その日常生活の大部分を費やしてゐながらも、眞に科學を身につけてはゐないのである。彼等はわが國民生活に於て創造せられて來た世界無比の藝術の世界とは、殆んど無緣の人となつてゐるではないであらうか。

わが日本のもつてゐる、最高の科學と藝術の香氣とを以つて、勤勞層の生活を薫習し、わが國民のもつてゐる、最高の文化に、彼等の生活を接觸せしめ、以つてその生活を培ふことは、やがてはその技術的水準を高め、その生産性を

向上し、國民的資質を向上するための、必須の手段であると思ふ。

萬葉の歌が、婦人勞務者によつて歌ひ出されて、殺風景な作業場を潤ほしてよいのである。たとへ萬葉に行かなくても、明治大正の時代を通じての秀歌が、民衆のものとなり、その生活をうるほしてよいではないか。東湖の正氣の歌がいたるところに朗吟せられ、山陽の愛國の詩が、工場の片隅から朗々と歌ひ出されることに、むしろ吾々の念願の來る日の近きを思ふのである。

彼等の中には、その業に於て精通してゐる人がゐるのである。道に於て樂しみ、道の中に悅びを體得してゐる人がゐるのである。この人こそ、國民の至寶である。國民の至寶としてのこの資格こそ、最高の文化を享受し、これを十分に咀嚼し得る資格であり、能力であると思ふ。勞務者だから、低い科學を、低い藝術を、そして卑近な習俗を與へて可なりといふ考へ方ほど、人を誤まり世

を毒するものはないと私は思ふ。わが勞務者が、常に、わが國民のもつてゐる最高の文化に接觸せしめられ、絶へずそれによつて、その人生を向上することが出來るといふ悅びを眞實に自覺せしめられる時、彼等は心から發奮することが出來ると思ふ。

八、娛樂の創造

道の中に樂しみがあり、生活の中に悅びがある。その樂しさと、悅びとによつて、人生が向上すると私はいつたのである。この意味では、娛樂は生活の中に、創造されるものである。從つて勞務者は、彼自ら彼の娛樂を創造し、それを、彼と志を同じくするもの、彼の愛惜する同志に分ち與へてよいではないか。

支那事變が始つて以來、大陸の戰線の最前線から、兵馬倥偬のただ中に、清新潑剌たる文藝が生れ、美術が創造せられてゐるのである。荒鷲の母が、身命を君國にささげつくして、大陸の空に雄飛する勇士にかき送る短かい手紙の文

字の中の切々たる至誠と愛惜とに感激の涙をぬぐはない人はなかつたと思ふ。

産業の前線の仕事場からも、藝術と文藝とが生れてよいではないか。壯絶極まる熔鑛爐の仕事場から、地下二千尺の炭坑の切羽の作業場から、或ひは驚くべき精確度をもつた精密機械工作の作業場から、また或ひは機械化せられ、共同化されつつある新らしい農業と農村生活の中から、勞務者の文藝、農民の文藝が創造されることは、當然のことである。この文藝は、勤勞する人々の生活體驗の上に生成し、それを沃土するものであるから、必ずや、その同志の心を濡し、それを豐かならしめ、その志を激勵するの力をもつと思ふ。

彼等の生活の向上のために、多くの映畫が作られ、工業都市に、農村に、勤勞する人達に慰安と娯樂とを與へてゐる。勤勞する人々は、今日では、たゞそれら映畫の鑑賞者として、受益者としての資格をもつてゐるに過ぎないのである。全國五六百萬にも上る産業勞務者の間から、或ひは三千萬の農村青年の間

から、その仕事と生活との體驗を土臺として、映畫のスタヂオに活躍し雄飛する映畫俳優が出現し、映畫藝術に新生面を開拓し、以つて職場の同僚を心から樂しませ、激勵してよいではないか。

また科學の基礎に築かれた、生産技術の實踐者、擔當者としての、工業前線の勞務者の間から、驚異に値する新らしい生産技術の創造と發見とが起り得ないと誰が斷言し得ようか。またそれが科學の更に一層の發達を促進し得ないと、誰が斷言し得ようか、ここにも生産の最前線に勤勞する人々への、大きな期待がかけられてよいのである。それは決して單なる夢想に終らしめてはならないのである。

私の期待は、ただに、文學と美術、科學と技術にとどまるものではないのである。既に彼等の中に成長しつつある、新たなる生活態度と、それに基づく勤勞人生觀が、その生産組織の中に於て、清新なる社會觀、國家觀を釀成し、そ

れが正大にして、潑剌たる、意氣旺盛なる國民的信念に高揚せられ、そして最後には、一層に高い國民的文化の興隆に寄與し得るのであると思ふ。

女子勞務者の生活

一、婦人と勞働

いかなる職業、または勞務に從事する女子も、女性としての本然の成育を遂げ、女性の性の特質に於て、更に一層に高き文化創造の任務を果たして行かねばならない。また男子たると、女子たるとを論ぜず、またその生業の何たるかを問はず、凡てこの邦土に生を享け、邦土の中に生活をいとなむものは、その生活に於て、眞に奉公の誠をつくすことの悅びをもたねばならず、またその悅びをもつことによつて、その生活を豐かにし、向上しなくてはならない。卽ちその業に於て樂しみ、勤めて以つて衣食を豐かにし、その生活の安定を得ることが、

文化の向上、民族興隆にとつては基本的な要件なのである。

女子勞務者に對する國家的社會的方策は以上のやうな目標に向つて集中せられねばならぬのである。

かつて二宮尊德翁は、その農村振興策に於て、農村の振興の根本は、勤、儉、讓にあることを明示した。その謂ふところの「勤」とは、業に於て樂しみ、樂しみに於て業にはげむにある。その「儉」とは、時を惜しみ、資材を惜しみ、勞力を惜しむ生活の樹立にある。その「讓」とは、眞なるもの、正しきものに頭を下げ、長幼の序を正し、禮讓を尊ぶにある。かくの如き勤、儉、讓は、卽ち人德に歸すると思ふ。卽ちそれを一言にして云へば、二宮翁の勤勞の理念は、「禮」の確立にあり、それは文化の窮極ではあるが、それが大衆の生活に普遍的に體現されると、よき習俗となる。

卽ち巷に勤勞する婦人の間に、新たなる健康なよき習俗が創造せられねばな

らぬのである。婦人勞務者に對する生活の指導は、資本主義的產業體制を排除して、「禮」に基づく、「禮」をその理念とする產業體制を確立するにある。そこに勤勞する婦人勞務者の生活には、健康なる習俗が生れ、またその習俗の生々たる發展が、常に婦人の性的特質と、その特質に依存する婦人の使命の充足をよく助け、よく遂げしめるようにならなくてはならぬと思ふ。

二、婦人勞働の特性

婦人の身體は、外見上、男子に比して纖弱である。ただ外觀だけではなく、その罹病率も高く、而も一旦病氣になると男子よりも恢復力が弱く、治病日數は一般に永いのである。卽ち婦人の身體は、總じて抵抗力が弱く、男子のやうに强靱ではないのである。そしてこの事實こそ、婦人の「性」に附隨してゐる第一の特質をなしてゐるのである。

然るにもかかはらず、婦人には極めて强靱な、自然が婦人に附與した、第二

の「性」の特質がある。それは云ふまでもなく、母たる資質である。この資質は人類の歴史を通じて婦人にのみ繼承せられ、また人類が、その意志を以つて、それを護りつゞけて來たところのもので、育て、はぐくむ能力としての母性こそ、自然が人間に附與した、最も鞏固なる能力の一つなのである。婦人問題が、國民と人類の問題として重視される所以はここにあるのである。

婦人の勞働が、機械的生産手段の發達の歴史的過程に於て、世紀の一つの悲劇に算へられたのは、以上述べたやうな、婦人の性の特質と、生産的勞働との間に新たに發生し、而も絶えず增大した矛盾に基づくものである。現下の勞働力の再編成の企圖は、ここにその重大なる仕事の一つをもつものである。

巷に勤勞する婦人の生活の中に、健康な、そして一層に高められた習俗を樹立するためには、先づこの矛盾を解消し、悲劇の原因を芟除するとともに、婦人の生産的活動に、新生面を開拓し、これに新たなる性格を附與することが大

切である。そしてこれこそ産業に指導的役割を果しつつある人々によつての、時局下に於て、正になさるべき最も重要なる仕事であると思ふ。

一人の勤勞する婦人に共存する二つの相反する性質、即ち第一には、性の特質としての纖弱と强靱と、そして第二には、婦人の勞働に對する熾烈なる國家的要請と、母たることに對する婦人自らと、國民全體からの本能的な要請と、この二つの事實の明識こそ、正に婦人の勞働の現實の進行に備へ、またその明日のために、わが國民の全部に用意せらるべき、また婦人勞務者に對する指導と保護とが、まさに據つて以つて行はるべき、基本的な事項であると思ふ。

然らば婦人勞務者の現狀は果して如何であるか。

三、婦人勞務者の現狀

滿洲事變を契機として、わが産業の構成は一轉化を來した。その産業機構の轉化に附隨して、同時に大陸に於ける戰爭の擴大につれて、わが産業に於ける

婦人の勞務は急速なる變化を遂げつつある。試みに昭和六年から、昭和十三年に至る婦人勞務の變化を左表から窺ふことゝする。

昭和六年を一〇〇としたる婦人勞働者の指數

年次	全工業	紡績	金屬	機器	化學
昭和六年	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
七年	一〇〇・一	九七・二	一二〇・三	一三九・五	一一〇・二
八年	一〇五・三	九九・五	一五八・六	一八四・八	一三三・八
九年	一一四・七	一〇五・九	二〇八・〇	二三五・四	一五七・三
一〇年	一二二・一	一〇九・八	二五二・八	二八六・三	一八五・九
一一年	一二八・〇	一一一・三	二九八・九	三五〇・四	二一九・六
一二年	一三六・五	一一二・二	三七七・八	四八三・八	二五八・一
一三年	一三七・四	一〇七・二	四八〇・九	七八一・五	二三四・五

即ち全體としては、八年間に四割の增加に過ぎないが、その增加の各工業に於ける分布には驚くべき變化が現はれてゐるのである。嘗つて婦人勞務者の殆

ど全部(約八割)を占めてゐた紡績工業に於ける增加は極めて微弱であるが、金屬工業では殆ど五倍、機器工業では約八倍の增加を示し、化學工業に於て二倍半の增加を示してゐるのである。これによつて、わが日本の婦人の工業的勞務の性格の變化の全貌を窺ひ知ることが出來るのである。嘗つて主として男子勞務者によつてのみ占められてゐた、金屬工業や機械器具工業への婦人の進出が、いかに事變の發展とともに目ざましいものがあるかを知ることが出來ると思ふ。

それでは、いかなる年齢の婦人がこれらの新たなる工業部門に進出したのであるか。(上表をみよ)

年齢別	全工業
一二—一五	二九・五
一六—一九	三六・七
二〇—二四	一九・五
二五—二九	五・九
三〇—三九	五・二
四〇—	三・二

(昭和十一年第五回勞働統計定地調査報告中から)

即ち約七割は十九歳以下の青年女子である。日本の婦人の結婚年齢は、最近

の統計によると、滿二十三歳であるから、若し二十四歳までの婦人勞務者を未婚の婦人と假定すれば、全婦人勞務者の約八割五分は未婚の女子によつて占められてゐることになる。

嘗つて紡織全盛の時代に、吾々のみた婦人勞務者の年齢的性格は、事變に於ても少しも變化してゐない。わが日本の婦人勞務者の殆んど全部は、未婚の青年女子であり、その結婚年齢に達するまでの五年乃至十年の年月を工業圏内に於て勞務に從事する人達であると云ふことがわかるのである。

更に一歩を進めて、これらの婦人勞務者は、その從事したる作業に如何程の年月の間繼續的に從事してゐるのであらうか。彼等は、その就業したる工業的環境に於て、彼等の生活と、その能力とに於て、新らしい文化を創り上げ、健全なる習俗を樹立するために、十分に長い期間、その産業機構に留まるのであらうか。

次の表によると、約七割五分は五ヶ年未滿しか工業圏内にゐない。而も、全數の四分の一即ち二割五分は一ヶ年未滿者である。また全婦人勞務者の約半數は二ヶ年未滿のものを以て滿たされてゐるのである。

婦人勞務者の就業年限別（昭和十一年勞働統計調査）

就業年限	全工業婦人勞務者中	就業年限	全工業婦人勞務者中
六ヶ月未滿	一一・三	三 — 五ヶ年	一六・四
六ヶ月—一ヶ年	一四・四	五 —一〇ヶ年	一七・二
一 —二ヶ年	一九・二	一〇ヶ年以上	七・五
二 —三ヶ年	一三・八	總計	一〇〇・〇

併しここで吾々の注意すべきことは、わが婦人勞務者は、かくの如く、その就業年限は短かいものが多いのであるが、その年齢に注意を向けると、その大部分は二十歳未滿のものである。即ちわが工業圏内に勤勞する婦人の大部分は青年女子である。そしてその就業年限の大半は二ヶ年未滿であると云ふことに

歸着するのである。ここに婦人勞務者の生活指導や訓練上の重要問題が提出されて來るのである。

四　生活陶冶の對象としての婦人勞務者

人々は往々にして、かかる事實の上に立つて、婦人勞務者に對する訓練、教化の仕事の效果なきを理由とするのである。即ちかかる短い就業年限を有する婦人勞務者に對して、いかに教養の施設を整へ、いかに陶冶の方法を確立するとも、到底、その目的を達することは不可能であると主張する人がある。併し私はこれに與するものではない。何となれば陶冶と訓練とに於て、否、凡て人間の教育の仕事に於て、最も重んぜらるべきことは、その被教育者、被陶冶者の「機」であるからである。「機」をあやまたず、機をえらんで、これに陶冶を加ふることは、陶冶の第一要件である。即ち、わが產業に就業する婦人の大部分は、その年齡に於て、正に陶冶の加へらるべき絕好の機會を、その心と肉體の中に

もつてゐるのである。この好機は斷じて逸せらるべきではない、就業年限の短いことなどは、婦人勞務者がこの絕好の「機」の所有者たるに比較すれば、誠に僅少なる障害に過ぎないのである。

青年のもつてゐる國家的な使命の一つは、先づ何をさしおいても、その身心の陶冶と完成にあるのである。彼等青年女子は、自らの努力と意志とを以つて、その人格——母性の涵養を專らにすべきなのである。工場に勤務する青年女子の一日一日は、その重責の遂行の一日一日でなくてはならぬのである。

また事業主は、彼等青年女子のもつてゐるこの崇高なる國家的民族的使命の、彼等の意志と努力とによる遂行をば、あらゆる障碍を排除して、これを援け、これを擁護しなくてはならない。これこそ婦人たる青年を使用する事業主の國家的任務として自覺されねばならないのである。

事業主はこの國家的任務の前には、最も勇敢に、大膽に、その理想とその實

現を所期すべきである。ここに事業主の責任と光榮とがあり、事業の新らしい使命があると思ふのである。就業年限の短いことは、この使命の遂行を拒否し、これをはばむ理由にはならない。何となれば、この使命の勇敢なる遂行に於てのみ、婦人勞務者は、その事業場の生活の中に光明を發見し、その生活の希望を見出すことが出來るから、彼等はそこにつとめて永く止まらうとする念願を起すに至るのである。

婦人の工業への進出は、多くの場合、賃銀のため、生計のためといふ經濟的な理由にのみ存してゐるが如く解釋せられてゐるのであるが、私はさうは思はない。

青年は生活の光明を求めてゐる。青年は生活に希望をいだいてゐる。光へ、希望へといふのが、青年女子の新らしい生活への勇敢なる進出の基本的欲求であると、なぜ人々は考へ得られないのであるか。たとへそれが青年女子自らに

自覺されてゐなくても青年をかく觀、かく遇し、かくの如き地位に於て彼等に對處することが吾々の正になすべきことでないか。

五、婦人勞務者はいかに生活してゐるか

私は以上の論述に於て、わが婦人勞務者の現狀を大觀した。そして彼等の大部分が、正に生活の陶冶の絶好の機をその性格としてもつてゐることを指適したのである。

私はここに更に一歩を進めて、彼等青年婦人勞務者の生活內容について、少しく立ち入つて觀察してみようと思ふ。

私共の研究所で上野所員が、約二千名の各種の勤勞婦人について、その一日の生活の內容を一週間に亙つて、連續記錄せしめて、調査した成績によると、婦人勞務者の平均一日の生活の內容は、時間的に見て次表の如くである。

これによると、勞務に從事する時間は一日の約三分の一、睡眠が同じく三分

生活の基本的な時間		計	勤務時間		計	
睡眠	三二・〇		通勤			勤務（整容身廻休息食事を加へると四〇%となる）
食事	三・五		勤務			
休息	五・五		四・九		四六・〇	
整容身廻	五・〇		三〇・六			
				三五・五		

（二四時間を一〇〇としてし）

私生活（即ち餘暇）の時間		計
家事	五・七	
勉强教養	四・三	
身邊雜事	一・五	
保健	〇・六	
娯樂	三・〇	
團欒	一・二	
交際	一・〇	
其他	一・二	一八・五

（二四時間を一〇〇としてし）

の一であることは興味がある。併し今もし睡眠、食事、休息、身廻り雜事、整容といふやうな、婦人が一日の生活に於て、どうしても必要とする時間の全部を合算してみると、その合計は四六・〇%、即ち二十四時間中の約十一時間となる。婦人としての、人間としての生活を保持するために、十一時間の生活時間を必要としてゐるのである。勞務のためには通勤時間も入れて約十時間を要してゐるから、餘暇時間、即ち家事、教養、保健、交際、團欒といふやうな方面には、殘りの約三—四時間（二十四時間の一八・五%）が利用されてゐることがわかるのである。

この平均一日の生活時間の區分表から、吾々は、一日中の生活の各斷相に對して必要とされた時間の長さを知るのである。個々の時間を點檢して私の感ずることは、もつと、通勤時間を短縮することが出來ないであらうか、身廻りの雜事や整容に要した時間が、思つたよりも長いこと、これをもつと短縮して、有用な方面、例へば保健のために、或は教養のために、よい娯樂の時間などのために廻すことが出來ないだらうか。かやうな時間からいへば、さう長くもなく、むしろ短かい時間を、もつと有用なことに用ふる工夫である。即ち一日の

生活の時間をいかに配分するかと云ふことよりも、もつと重要なことは、その時間の利用、活用方法如何であり、ある生活の目的に使用された時間の内容如何の問題であると思ふ。例へばここに五・七%即ち約一時間半の家事に利用された時間がある。また四・三%即ち約一時間の教養の時間をもつてゐる。また三・〇%、即ち約四〇分の娯樂の時間をもつてゐるが、彼等はこの時間の中に於て、いかに彼等の家事を行ひ、いかに彼等の教養を高めるために費し、いかなる娯樂にこれを費やしたのであらうか、問題はここにあると思ふ。

今日の狀態から云へば、婦人勞務者の生産的行動に對しては、各企業は競ふて最善の指導を行つてゐる。婦人勞務者の凡ては、少きは一—三週間、長きは三—六ヶ月、新來の勞務者として待遇せられ、特別なる配慮の下に、その生産技術の向上策が講ぜられてゐるのである。併しながら、彼等は彼等のもつてゐる生活の基本事項、例へば睡眠、食事、休息、身邊雜事、整容等については、

ほとんど指導を受けてゐない。これらの婦人生活の教養は、彼等のなすままに放任されてゐるのである。若しそこに何等かの規律又は規制があるとすれば、それは仕事場の規則又は規律と云ふやうなもので職場と集團生活とを特色づけてゐるもの、或は長い間の資本主義的勞務管理の傳統からの指令又は習俗といふ位が關の山なのである。

そこには、よき住み方、よき暮しの仕方を內容とした本來の婦人指導は行はれてゐないのみならず、往々にして、彼等がその勤勞のために入ることを餘儀なくされてゐる集團生活が、婦人に缺くべからざる教養としての、よき主婦のもつべき家事的教養についての考慮は、その影さへも見ることが出來ない。

また彼等に最も缺乏し、而も彼等が自覺せずに、而もその心の奥に巣食ふてゐる教養への欲求や讀書への指導は、全々缺けてゐるのである。彼女等がいかに知ることを乞ひ願ひ、讀むことを欲するかは、通俗な婦人向き月刊雜誌の各

種各様のものが、多くの刺戟的な表題に於て、彼女等の心の渇をいやしてゐるかを見ればわかる。それほどに彼女等は心の糧を求め、知識を求め、人生を知らんとしてゐるのである。

また彼女等が一日平均僅かに十分の保健のための時間をもつてゐるに過ぎないことは、大いに注目せらるべきである。彼女等の年齢にある中等學校に修學しつゝある青年女子は、毎日少くとも平均一時間の、而もよく仕組まれた、組織的な指導内容をもつてゐる體育の時間をもつてゐるのである。勞務に從事する女子は、その勞務の故に、一層によき休息の時間をもち、一層に整備し、組織づけられた、合目的な體育の時間が附與せらるべきである。大きな工場や事業場では、昨今は漸くこの點に關して、よき指導の手をさしのべてゐるところもあるが、全體としては、それは九牛の一毛にしか過ぎない。彼女等の保健の時間は餘りにも短い。一週間にやつと一時間の長さの保健時間をもつてゐるに

過ぎない。彼女達には、少くとも毎週三回、一回一時間づつの保健のための時間が與へられ、その時間の最も有効な、そして合目的な利用方法が、懇切な指導を以つてなさるべきだと思ふ。

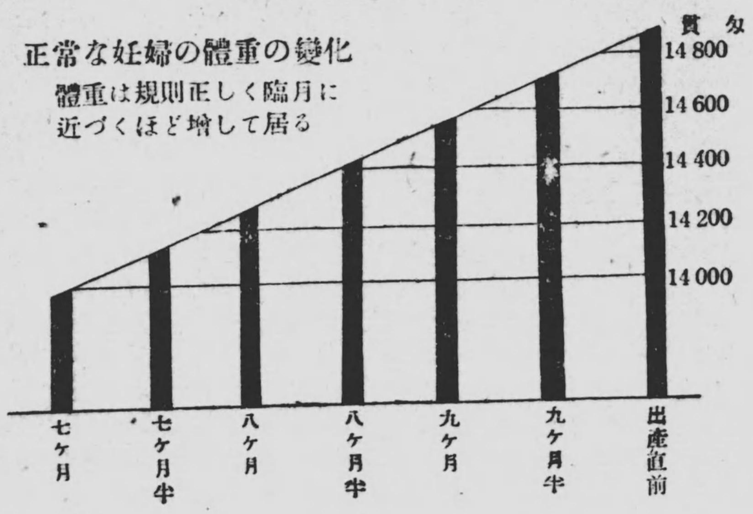
次は彼女等は毎日平均約四十分の娯樂の時間をもつてゐる。保健のために彼女等の費す時間に比較すると、少しは長いが、その内容に至つては、極めて貧困である。また食事と休養の時間にしても、彼女等の住める環境には、多くの場合、よき習俗が出來てはゐない。私は寄宿舍の食事を指して强制榮養様式だと評したことがある。その意味は食慾を思はず、味覺を考へず、ただ經濟と勞力とによつて左右され整へられた食事が、一様、一律に供給されるのが常であるからである。よく調理され、その材料に於てよく工夫され、その勤勞の性質に適應し、その風土と氣候とによく順應された食事が、彼女等に供給されなくてはならない。これによつて彼女等は、食の眞味、食の調理、食の材料を日々

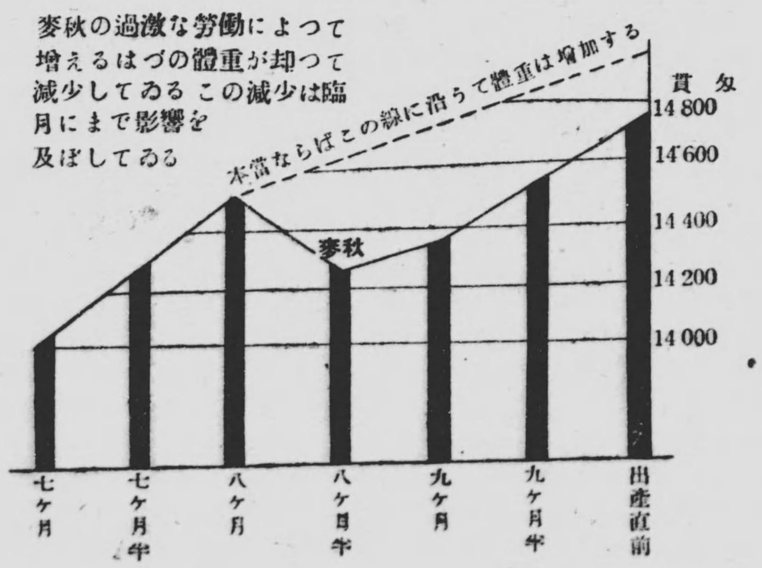
知ることが出來るのである。彼女等は一年中の何日かは、生産的仕事場の勤勞を休止して、彼女等の同僚のために食事を整へ、食堂を用意することに從事せしめられてよいのである。かかる試みは、殆んど、どこの工場に於ても、未だ嘗つて行はれたことをきかないのである。わが婦人勞務者の生活の指導がいかに地についてゐないかがわかるのである。

六、結　語

私はわが日本の婦人の工業への進出を半ばは驚異の眼を以つて、そして半ばは危惧の心を以つて凝視してゐるものである。私はこの驚異と危惧の心の底から、婦人自らが、自らの意志と發奮とを以つて、自らの新らしい生活環境の下での、新らしい、健康な、そして希望に滿ちた生活を切りひらいてくれることを熱望してゐる。わが産業文化が一層に高くなり、わが産業の生産力が更に一層に高い水準に上るためには、彼女等のさうした意志と努力とによる新たなる

妊婦の體重の變化





豐かなる生活の建設が必須の要件であると考へてゐるからである。私は私の仕事場から、私の微力を彼女達の新らしい運命の開拓に對して、あらゆる機會に、そしてあらゆる科學的な、そして實踐的な努力を以つて、彼女達の進路に對してお手傳ひをしようと思つてゐる。

婦人勞働の展望

一

フランス政府當局は、潮の如きドイツ軍の攻擊の前に、やがて來るべきドイツ軍のパリ攻略に備へて、姙婦と幼兒の全部を避難せしめたこと、青年の大部分を召集し、これに代ふるに女子を以つて銃後のあらゆる勤勞に從事せしめたのである。パリー陷落は實に容易ならぬ事態であつた。ドイツでも、イギリスでも、歐洲の交戰國では、多分凡てかかる非常手段がとられてゐるのであらう。

フランスの政治家達は、フランス民族の將來を、この兵馬倥偬の間に於て、本能的に、姙婦と幼兒とを除いた全市民の血

潮によつて、國都を護らうとする決意には、誠に悲壯なものがある。

私はここに「國民の將來は母性にかゝつてゐる」と云ふ、既にいひふるされた言葉を、改めて引き出して來る必要を感ずる。國家の興亡の危機の前に、最後の悲壯なる手段が次々と實施せられてゆく中に、その究極に於て、フランスは、その國民の姙婦と幼兒とを、最後まで護らうと決意したのである。

母性を護ることは、かかる究極に於ける非常手段としてのみ考へられてはならない。大切であることにはみな異論はないのであるが、平常時にはほつておいても、大したこともない。またすぐにむくいが覿面に來ると云ふことでもないから、人々は案外平氣でゐるのである。併しわが邦の現狀から考へると、母性の問題はそろそろ重大なことになりかかつて、問題は既に切迫してゐると思ふ。

その最も重要な問題は婦人の勞働である。事變が始まつて以來、婦人——特に若い婦人の產業前線への進出が、頓みに增加してゐることは人々の知る通りである。重工業方面の仕事場で、婦人の働かない部署はない位に、婦人勞働の前線が擴大されてゐる。加ふるに、歐洲戰爭の歸趨如何によつては、いつ世界的な戰爭の渦中に突入しなくてはならぬかもしれない情勢にある。そんな時機が來ることを豫想すると、恰度今、イギリス、フランス、ドイツなどで行はれてゐるやうな、すべての軍需的な生產的勞働への婦人の參加が、國家的要請としてあらはれて來るのである。かかることを豫想して、一應婦人勞働についての展望をここに述べてみることも決して無益ではないであらう。

二

男女兩性には各々獨自の特性がある。男が女に代り、女が男に代ることは、到底不可能である。これが自然の法則である。この自然の法則は、何を以つて

しても打ちこわすことは出來ない。併し一方、男も女も仕事をもつてゐる。仕事をもたない男もなく、女もない。仕事により、勤勞によつて、生存の自覺をもち、生活の悅びをもち得る。身體と精神との發育を遂げ、その人格をみがくのも、その仕事、その勤勞を通じてである。

婦人は原始の時代からずつと働き通しに働いて來たのである。難澁の生活に堪へ、嶮難の途をふみこえて、働きつづけて來たのである。婦人が關與し、婦人によつてなされなかつた勞働はないといつてよいのである。また男子が破壞したところを、女子がそれを建設しなかつたならば、人生は、國民は、どうなつてゐたであらうか。

婦人はかくして、最も困難な、時としては單調な、極めて忍耐を要する仕事に從事して來たのである。そして婦人の仕事の主力は家族、國民生活の典據としての家族生活に於て、最も本質的なそして而も彼女達にして始めてよく爲し

遂げ得る母性的仕事、子女の教養の仕事を、幾千年の人間——國民の歷史を通じて、全く獨自に彼女達の手によつてなし遂げて來たのである。そしてこの婦人に特有なる光榮ある生活の歷史に於て、その任務に基づいていろいろの悲劇がまたくりかへされて來たのである。

併し婦人生活に迫つた眞の悲劇は、國民に經濟的社會的、國民的困難の增大とともに起つて來たのである。この悲劇のうちの一つに、婦人の勞働前線への參加が數へられたのである。時局下の婦人勞働の擴大も亦、この意味に於て、國家と國民生活とに發起した重大問題として認識せられなくてはならない。

現下の婦人勞働の擴大は、嘗つてありしが如く、男子の生活費の不足を補ふための、家庭外勞働ではない。婦人の從業してゐる產業前線に於ける男子の勤勞報酬の過小に原因して、婦人の勞働が擴大されつつあるのではない。勿論婦

人自身の勤勞報酬が男子のそれに比して、低額であるといふ、過古の時代の營利的事由に依存してゐるのでもない。それよりももつとさし迫つた事情は、全面的な勞働力の不足である。そのために、表面、生産的でないやうに見られる婦人の常時勤勞が、生産部面に追ひ立てられてゐるのである。軍需生産力の强大が、所謂民需生産能力を追ひ立てて、婦人を生産部面に招致してゐるのである。

併し考へてみると、民需生産能力と云ふ言葉を以つて云ひ表はされる婦人の家庭内勤勞は、平時でも、戰時でも、國民生活に必須なる勤勞なのである。今現に、生産部面に流れ入つてゐる多數の若い婦人勞働は、この國民生活に必須なる民需としての能力——婦人に固有なる國民的性格に錬へ上げらるべき家族的勤勞の徒弟なのである。この徒弟が一人減ずること、數十、數百、數千、數萬と減ずることは、婦人に固有なる國民的性格を造り上げる國民的仕事に缺陷が生ずることを意味するのである。ただこの方面に缺陷が生ずるだけで事がす

めばよいのであるが、まだ他に見逃し難いことがあるのである。

それは婦人が現に進出してゐる生産部面の勤勞の多くは、その殆んど全部が不熟練勞働の範疇に入れらるべきものである。不熟練勞働でなければ高々、一寸練習さへすれば誰にでも出來るといつた性質の仕事である。工業的技術の高度の合理化の進行は、凡ての重筋肉的な勞働を驅逐し、それを機械力を以つておきかへたのである。かかる合理化方策、勞力節約方策がいろいろな戰時的理由によつて、十分に進行してゐないところでは、婦人も亦時としては、重筋肉的勞働の重壓下にある場合があるが、とにも角にも、全體的に筋肉的な仕事は減じ、それが機械力に代へられ、作業は益々分化し、專門工作機械の使用が、わが重工業の全體を支配し出してゐる。それは生産力擴充を目標として進む、多量生産實現の必然の過程である。この作業の分化と、專門工作機械の創造と

は、現代工業技術の推進力であるが、そのために勞働も亦分化し、纖細化し、單純化し、單調化するのである。重い、力の要る仕事が、輕くなり、爲し易くなつたのは事實であるが、その理由が同時に、健康を保持し、人間の生命活動を向上すると云ふ理由にはならない。專門工作機械は仕事を輕減し、熟練を不要にするから、婦人を採用してよいと云ふ理由は成立しない。婦人でも出來るから、婦人に代へるので、婦人に獨有なそして男子に缺けてゐる能力が、婦人がその仕事に從事することによつて發揮出來、それが國民生活の向上に役立つと云ふのではないこと勿論である。

上述するやうな事由によつて、若い婦人が重工業に全面的に進出してゐるのであるが、一方に於ては誠に奇體な現象が現はれ出してゐる。それは婦人勞働力の不足である。男に代つて、婦人を動員しようとする意志が熾烈になるにつれて、婦人の勞力が缺乏し出してゐる。いくら募集しても、最早、婦人が從前

ほど出てくれなくなつた。主として婦人勞力に依存して來た紡績工場方面、一般に纖維工業方面に婦人勞務者の缺乏が起つてゐるのである。これは婦人の勞働前線が擴大され、作業部署が增大したことに主たる原因があるのであるが、他方、農村の經濟狀態が近年になく、こゝ一、二年好調にあり、その上に農村勞働力にも相當深刻な不足があるので、今まで工場へ出てゐた多くの若い農村の婦人が、家庭に歸農してゐる事情もある。これらは頑として再出馬しない。工場など見向もしないのである。彼女達は男子に代つて鍬をとり、またこの機會にみつちり、家庭內に於て婦人としての教養を積まうといふのである。農村では、農村裁縫女塾が起つて盛んになつてゐる。農村の女學校は超滿員である。

三

農村では、婦人がけなげにも、農業勞働の第一線に立ち働いてゐる。戰時下の農業生產には、たしかに婦人の力が、大いに活潑に働いてゐることは事實で

ある。

ある村長の報告によると、昨年婦人の夜盲症（夜めくら）がうんと發生した。乳幼兒の疫痢による死亡が平年に倍加した。婦人が働かねばならぬため、婦人勞働が加重したためであるから、何とかして婦人勞働を輕減しなくてはならぬ。婦人の病人が增加し、子供の健康が惡くなるやうでは、應召者に相濟まない。銃後の村を護るには、先づ婦人勞働の輕減からであると云つて私共に協力を求めて來たのである。銃後の農業勞働が婦人の强力なる參與を要請したがために婦人の榮養に障碍が起り、婦人の任務たる哺育の仕事に缺陷が起つたのである。榮養が惡いためといふよりは、むしろ勞働强化のために、平常通りの榮養では健康がもちきれず、勞働のために榮養障碍が起つてゐるのである。

またある農村では、昨年中に出生したる七、八十人の初生兒の體重は、殆んど全部と云つていいほどに、日本の初生兒の平均體重よりも少なかつたと云ふ

事實がある。母體、卽ち姙娠中の勞働が加重されたために、胎兒の發育が障碍せられたのである。また私はある農村で、姙婦の體重が最も增加する姙娠七、八ヶ月に於て、增加するよりも、減少した例を實際に知つてゐる。彼等はその家族の勞働不足のために、麥刈田植の激勞働を、男まさりに働かねばならなかつたのであるが、その農繁期が過ぎた後も、そのために、彼女の體重は遂に出產にいたるまで恢復しなかつたのである。勿論、胎兒の順調な發育と彼女自體の體組織の維持が、勞働負擔の增大のために犧牲にせられたのである。

かくの如き事情は、今農村に隨分廣く進行してゐると思ふ。この惱める母をたすけるためにも、農業勞働方法の改善が要望せられ、農業勞働組織の新生面が創造されねばならぬのである。またかくの如く惱める母を扶けるために、工業に動員され、賃銀につられてふらふらと興味もない仕事に出かけようとする、農村の若い婦人が農村に頑張り、この母の側にゐて、母を扶け、母をいたはり、

母をはげましつつ、他方に母としての、母たるべき、母たる資格を得べき徒弟としての修養を積まねばならぬのである。

即ち工業に於ける婦人勞力の不足の事情を農村の側から見、農業勞働の内部から見ると、誠に無理のない、涙ぐましい事實が展開されてゐるのである。無理に農村の若い婦人をかりたててはならないと思ふ。母の側を離れても、母に無理のゆかない娘をねらつて工業の加勢に出てもらはねばならない。この親切とこの理解とがなく、たゞ高賃銀や、好條件を並べたてて、母娘を、家族から、農村から、遠離し、農業勞働と工業勞働にその力を分散することは、國民生活の全體の進展のためには頗る考へものであると思ふ。

かかる事情は、一般に婦人勞働問題として取扱はれてゐるのである。成程婦人勞働問題には相違はないが、それは實は農業勞働問題、農村問題なのだ。戰時下の農村の婦人勞働問題は、農業勞働問題なのである。この婦人の勞働負擔

の輕減を圖り、婦人の勞働力と健康を確保し、その幼兒の發育を擁護する方法は、一に農業勞働自體、農業生活全體に革新をもたらす仕事になのである。

四

一般に婦人は男子よりも疾病に罹り易い。罹病率が高いのである。特に日本では、國民病とも云ふべき、肺結核は青年から壯年にかけての年齢に於て、婦人に斷然多數であることは周知の事實である。而もそれは婦人の勞働と極めて密接な關係にあるといふ推定は、多くの研究者の一致せる見解である。

婦人は男子に比して罹病率が高いのみならず、罹病期間が永いのである。多く病氣にかかり、而も一旦かかると男子よりも永く病臥するのである。恢復により多くの時日を要するのである。即ち婦人は總じて疾病に對する抵抗力が弱く、體組織の活動力が低いのである。

今日まで、婦人科醫より提出された知見によれば、工場に勞働する婦人の下

腹部の疾病は、家事的仕事に從事する婦人に比して五—八倍も高い。また工場に勤勞する婦人にも、農業勞働をいとなむ婦人に於ても、流產や死產が多い。また婦人の出產に至大の關係を有する骨盤の發育に關する調査によると、機械工場に於て勞働に從事する婦人には狹窄骨盤が三割も發見されてゐる。婦人の骨盤の發育完成は十八、九歲である。この年齡までに引き續いて工場に勞働すると、骨盤形成に障碍が起ると云ふのである。私はこれをある紡績女工手について調べて見たのであるが、日本の婦人勞働者の勤續年限は僅かに一ヶ年半乃至二ヶ年がせいぜいであるために、かかる事實はこれを認めることが出來なかつたのである。若し婦人勞働者の勤續年限が延長し、その作業部署が擴大され、重工業全面の婦人勞働が定着化されるやうであるならば、これは定めし問題となつて來るであらう。

併しここに興味ある事實がある。統計の示すところによると、婦人は男子に

比して罹病率も高く、死亡率も高く、生命の危險が男子に比して多いのにもかかはらず、その平均餘命は男子よりも高いことである。即ち婦人は長命だといふ事實である。即ち第四回の生命表についてみると、零歲の男子の平均餘命は四二・〇四歲、女子は四三・二〇歲であつたが、最近の第五回生命表では男子が四四・八二歲、女子が四六・五二歲となり、男女の差は一層大きくなつてゐる。即ち女子が一層に男子より長命になつてゐるのであるが、これを婦人勞働の最近の情勢から考へると、次の生命表に於て、かゝる動向がよく維持されるかどうかは極めて疑問である。私は婦人勞働の展望からすれば、平均壽命の男女の相異はなくなり、男女の生命表の數字は相接近するであらうと思ふ。

かうなつて來ると、その時には婦人の健康擁護を叫んでみてももう遲いのである。今からこのことあるべきを警戒しなくてはならないのである。即ち婦人勞働保護と婦人勞務者の生活指導とは、この戰時下から、極めて愼重に遠大な

國家的理想の下に强力に着手されねばならないのである。

わが國民は既に炭山の採炭勞働に婦人を出働せしめてゐるのである。乳兒をもち、二、三人もの子女を有つてゐる婦人が、炭山の勞務に從事することの必要を認め、母性の重大性に眼を蔽ふてこれをその夫の勤勞する地下の職場に送ることを認めたのである。これは相當に重大な國民的事變である。現下國家的情勢がこれを是認してゐるのである。地下に勤勞する母性をあらん限りの誠意と愼重なる用意とを以つて護ることが、國民的任務として自覺されなければならぬことを意味してゐる。婦人の身體は男子に比して抵抗力が弱く、外觀的にも纖弱に見えてはゐるが、實はその生活の中には否定し得ざる自然の强靱性がある。それは彼女の國民への奉仕の仕事であつて、國民と人類との存續する限りの大切なもの、卽ち母性である。炭山作業に於ける婦人勞働の擁護は、この

婦人の本性に結びついてゐる二重の、一つは弱い、二つには、强い、性の特質に對して極めて剴切な方策がとられねばならない。

五

最近の官廳の發表は出生率の低下を報じてゐる。工場に勤勞する婦人は多くは未婚婦人であつて、有夫の婦人勞務者は二割、多くて三割にもなるであらうか。從つて事變下の出生率の低下は直接に、婦人の勞働に關係のあるものではないであらう。併し今日の若い青年男女の多くは、二人ともに共稼ぎをしなくてはならない。事實共稼ぎが事變下に增加しつつあると推定される理由がある。例へば夫は工場、鑛山に、妻は農業に、所謂農業を兼營する工業勞働者が激增してゐる。共稼ぎの夫婦の增加と云ふ點では一人の子供の出生は、一つの經濟的不幸である。經濟的不幸と實感されるのである。出生とともに、妻が職場を離れると、收入は約半減するであらうから、それを經濟的不仕合せと感ずるの

は餘りに普通のことである。また勤勞層に於ける子澤山はわが邦の多くの調査の示すところであるが、妻の高年に於ける出產は彼女の健康をさへおびやかす事例が多いのである。ここに全家族の經濟的破綻がまちもうけてゐる。ことに妻の慢性的な病氣のために、意氣鎖沈した勞務者の多くを仕事場に發見することが出來る。また家計主たる勞務者の慢性的疾病のために多數の子供をかかへて、その妻が生活にあへいでゐる。誠に絕望的な生活の數々を吾々は知つてゐる。これらの子澤山の勞務者の生活保護に對する、國家的な社會的な援助の手は、未だ極めて薄弱である。社會保險制度は、多數の子持ちの年老いたる忠良なる勞務者のためにも、また共稼ぎする若き潑剌たる勞務者のためにも、今や全面的に革新せられ、國家的新情勢に對應されなくてはならない。

母が惱めば、子供がなやむのである。母の生活の嶮難はその子女の生活の嶮難である。從つてそれはその夫の勞苦である。婦人勞働の問題は、ここに國民

全體の運命を支配する問題として了解される。

人は農村の出生率が、都市の出生率に比して斷然高いことを知つてゐる。都市の生活に出生率の低下の原因が潜んでゐるのである。この問題に關聯して、現下に進行しつつある國民生活の產業化の過程を直視しなくてはならぬ。事變下では、昨年の農村は、今年一朝にして二十萬三十萬と云ふ人口を抱擁する都市計畫が樹立せられ、その實現が資材の不足に障碍されつつも、極めて强力に進行しつつある。わが人口は、軍需生產工場を中心として、都市化しつつある。人口の都市化は、この中に出生率の減退を內包して進むのではないか。そこに警戒せらるべき重大な問題が提出されてゐるのである。社會政策の根本的革新の必要がここにある。日本の社會政策は、この全面的な國民生活の產業化と、人口都市化との情勢に對處して、根本的に出直す必要にせまられてゐるのである。社會政策が從來のやうに、凡て社會現象が起つて了つてから、これに對す

る一種の治療的政策として行はれるのではなくして、もつと積極性をもたねばならないのである。

物動計畫と勞務計畫とは、その强力にして、有效なる進行と成功のために、社會政策を必然的に必須の要件として伴はねばならぬのである。

社會政策を伴はない物動計畫には具體性がないのである。國民生活を向上し强化しないから、不慮の齟齬が起るのである。その社會政策の中でも、婦人勞働を全面的に擁護し、活力化する社會政策は、國民生活の進展に關しては極めて重大なるものである。

現に進行してゐるわが國民生活の産業化は、確かに國民生活相樣との性格とを本質的に革新する力をもつてゐるものである。農村生活が都市生活になり、婦人工場勞務者が多數に出來上るといふ外觀的な問題ではないのである。それ

は國民の生活の本質をその核心に於て變化せしめる力をもつてゐるのである。而も産業化は國民に經濟的利福をもたらしつつあることは否み難い事實である。これは更に國民の生活を高め、國民の勤勞を、輕減しつつある。工業にも農業にも、全面的に勞働輕減のための技術的合理化が進捗しつつあるを見るのである。

今や、國民――特にその勤勞層は、この技術的革新の時代をむかへて、わが國民中に保有せられ、創り出されて來た、文化と文明とに接觸しつゝある。國民生活の産業化によつて、國民的文化と思想とに接觸する範圍は急速に擴大せられつつある。科學的知識と、科學的技術とは斬新なる形式と、その活動とを通じて、勞務者に普及しつつある。産業化はまた人間に仕事場に於て協力することを敎へ、協同の精神を仕事場に實現しつつある。工業に、農業に、私はこの現實の進行を、極めて有意義な事實として凝視してゐるのである。

また國民生活の産業化に基づいて、國民の作業能力、生活力は確かに高まり、

増大しつつあると同時に、空間と時間とを征服し、それをあらん限りの努力を以つて、生活活動の内部にとり入れることに着々と歩を進めつゝある。かかる一般的變化の中に、婦人の産業前線への參加が擴大されつつあるのである。かくて婦人の人生の貢獻に新たなる場面が拓かれつつある。この機會に於て、わが婦人勞務者は、その婦人としての特性に、更に新たなる而も本當の價値をもち來らさねばならない。これが婦人勞働の展望の重點であらねばならぬ。

國民生活の産業化は、かくの如く國民の文化的財産を强化し、その文化的活動に新たなる展望を加ふるものではあるが、それが人間——國民をして自然から遠ざからしめるものであることは否み難い事實である。幾百萬の婦人勞務者は新鮮なる空氣と陽光から遠ざかつて、新たなる職場の生活に入つてゐるのである。それのみならず、都市への移住と、借家住居と、集團への從屬とは、婦

人の勞働の進展に伴ふ極めて好ましからざる事實である。婦人の勞働と出生率の低下の事實も、この間に派生してゐる一つの生活の斷層であるに過ぎないと思ふ。婦人勞働に伴ふて起るかかるもえさかる火焔は、今後も尙益々はげしく燃えさかるであらう。燃えさかる火はやがてまた自ら消える。

今や、わが國民はその國民的意志を動員して、都市と住居と、工場と仕事場と、生活と健康とのために、最善の闘ひを開始しなくてはならぬ時機である。新らしい秩序とは、この闘ひによく闘ひぬき、よく勝ちたる後にこそ、國民生活につかみとられるのである。

婦人は婦人の幸福のために努力しなくてはならぬこと、今日より急務なる時はない。婦人がその女性としての任務と仕事とに努力するべきこと、今日より重大な時局はないと思ふ。

婦人の坑内勞働

炭山や鑛山の勞働力の不足が深刻になるにつれて、先づさし當つてとられた戰時對策の一つは、婦人の坑内勞働を許容することであつた。これは勿論炭山や鑛山の多くが、山間に位し、人里を離れてゐるために、勞務者の多くは、山の社宅に住居し、平素から家族勞働力に餘裕があることが知られてゐるために、これを出炭のために動員することが、先づ手近な手段だと關係者に考へられたことにもよるのである。

私は婦人の入坑が認容されると同時に、ある炭山を訪ねて、その狀況を觀、山の勞務や技術の擔當者と懇談を遂げ、入坑する婦人勞務者の身の上について、

切々たる私の衷情を披瀝したのである。

この訪問旅行から歸ると同時に、私は意見書のやうな形式をもつて、關係當局に私見を申達し、その參考に供したのである。

今、私はこの意見書に基づいて、この一文を草することにしたのである。

私はある炭山で、婦人の坑内勞働狀況をつぶさに觀察したのであるが、私のみた婦人は實に體格のすぐれて立派な、二十五六の婦人であつた。彼は後山として先山たる彼の夫の指揮の下に勞働してゐたのである。後山の仕事は、炭層の薄い炭山では、相當につらい仕事である。炭層の薄い切羽の常として、その換氣は殆ど無く、無風で濕度は百パーセントである。またその溫度は攝氏三十四五度の高溫を示してゐたのである。從つて着物などは着てゐられない。そんなものを纏つてゐては仕事にならないのである。彼等は腰部に小さな布片を卷

きつけてゐるだけである。先山たる夫も、後山たる今一人の男子も、勿論裸體での勞働である。着物をきてゐないことが、かかる高溫環境での筋肉勞働に最も適合してゐるのである。身體は汗にまみれ、汗が玉をなして背をつたつてゐる。全身は炭塵のために、まつ黑になつてゐる。その上を汗が流れて、背中に幾條かの流汗の線が出來てゐる。その線の上に、いつの間にか、また炭塵がついて、線をけしてゆく。暫らくみてゐるうちに、私の目の前で幾度かそれが繰り返されてゆくのである。

遠雷のやうな發破の音がきこえてくる。爆藥が切羽で炭壁をこはした音である。その音のしてゐる前後は、坑夫達の休みの時間である。餘り華やかな話はしない。暗い坑道の中に、裸のたくましい男女の坑夫達が、石や坑木に、腰をおろして靜かに、憩ふてゐる。一種沈痛な氣配がたゞよふてゐる。暫らくすると、彼等は腰をあげ、受持ちの切羽に向つて進んでゆく。行きがけには空の運

炭車を後山たる男と女の坑夫が後押をして進んでゆく。切羽につくと、婦人はシャベルをもちあげる。そして今しも發破がかけられて、くづれおちてゐる石炭を掬つて、運炭車の中になげ入れる勞働を始めるのである。

勞力が不足してゐるために、運炭車のレール面を堀り下げるだけの餘裕がない。從つて炭車の高さは地面から一米もの高さにある。一體かかるレールの引き方は不合理極まることなのである。切羽の地面から、レールの面を一米も堀り上げておけば、運炭車の表面が、丁度石炭がくづれ落ちてゐる地面と、同一平面になるから、坑夫達は石炭を炭車に積みこむ時に、石炭をシャベルで掬つて炭車に流しこめばよいのであるから、仕事は非常に樂に出來るのである。レールの面をそれだけ堀り下げる勞力を惜しみ、それだけの餘裕がないからシャベリングに非常な勞力をかけねばならない。こんな馬鹿な無駄な勞力の使ひ方をして、石炭の增產計畫が進んでゐるのである。私はかゝる勞力の無駄使ひを

内地でも見、滿洲でも、蒙彊の鑛山でも觀たのである。誠に遺憾千萬なことである。

一回のシャベルに掬はれる石炭の重さを約四瓩とすれば、彼女は、一つの炭車に一杯石炭を積みこむために、一六〇回のシャベリングをするのである。シャベル自身の重さが約四瓩あるから、彼女は一のシャベリングに八瓩の重量を一米の高さになげる。積みこみ作業を一六〇回つづけてやるのであるから、一回の積み込み作業を完了するまでには、最小限に見つもつて、一二八〇瓩米の仕事をすることになる、相當の重勞働である。これを一就業時間八時間の中に、何回か繰り返し行ふのであるから、並大抵の仕事ではない。普通の婦人には到底出來ない事である。炭山の切羽の仕事をみると、統後の生産的活動が如何に大切であり、また勞苦にみちたものであるかがわかるのである。

田植や、田の草取り、梅雨明けの麥秋の激しい勞働も、統後の勞苦の多い仕

事ではあるが、これにはどこかに收獲の悦び、育てはぐむなごやかさがあるが、石炭を掘る地下の仕事は全くつらい仕事である。賃銀のために働いてゐながらも、金勘定を超越した、國民への奉仕の仕事だと私は思ふ。

坑内に働く婦人は、積み込みが終ると、その石炭が一ぱいに積み込まれた炭車を押して切羽を出るのである。やつと炭車がすれすれに通れる位の運炭坑道を、二、三丁も後押しをして本坑道に出なくてはならない。これも相當につらい仕事である。それでも彼女は、それを男子なみにやつてのけてゐたのである。

詳しく作業量の計算を試みる資料はないが、今日迄私の調べた各種の勞働と比較考察して考へると、彼女の八時間内に行ふ勞働量は多分一日に四〇〇〇カロリー位の熱量を必要とする勞務者の生活に匹敵するであらうと推定される。

農繁期の婦人勞働には、よく働らく、屈强な婦人に往々してこれに相當する勞働がある。

シャベリングをやつてゐる彼女は實に懸命に働いてゐる。如何にも邪念のない姿だ。誰が彼女の働き振りを見て、賃銀のために働いてゐると思ふであらうか。よくあれだけ働らけるものだとつくづく感嘆したのである。

坑外へ出てから聞いてみると、彼女には二三ヶ月前に生れた乳兒がある。その上に尙三歳と、五歳の幼兒がある。彼女は三人の子女の母である。彼女はそれを彼女の母親に托して坑内に働いてゐるのである。勿論乳兒を授乳のために坑内につれて入る事は出來ない。毎朝六時に入坑しなくてはならないとすれば、彼女は彼女の幼兒がまだ目覺めない間に床を離れ、安らかにねむつてゐる彼等をあとに坑内に下るに相違ないのである。乳兒と幼兒達は、彼等の祖母の手にゆだねられ、乳兒は人工榮養によつて、幼兒は祖母のつくる食餌によつて榮養されてゐるに違ひない。三人の乳、幼兒の八時間の生活を護る仕事は、一人の祖母にとつては相當の難事であり、重任でもある。

加ふるに、入坑して働らく婦人には、五日毎に就業時間が交代する。一番手が五日つづいた後に、二番手即ち午後から夜へかけての就業時間がまはつてくる。三番手たる深夜作業は婦人には禁じられてゐるから、炭山でも原則として婦人は入坑しない。併しこれらの交代する就業時間の變化は勿論、纖維工業の女子にも、紡織に働らく女性にも、また軍需工業にも、廣く行はれてゐるのであるが、これらの場合にはその女子勞務者の多くは未婚者である。併し炭山に勞働する婦人の多くは有夫の婦人である。厚生省は二十五歳以上の婦人の入坑を認めてゐるからである。有夫の婦人にとつては、變化し、交代する就業時間制は、決して好ましいものではない。家事が停滯する。その乳、幼兒は母親に親しむことの出來ない晝間が暫らく續いたと思ふと、今度は母親のゐない夜がつづくのである。炭山に勤勞する母とその乳、幼兒とは互に相親しむことの出來ない晝と夜とを交互にもつことになるのである。

坑内作業に婦人を使用することを許容するのは、時局下最も緊急なる國家的要請としての、出炭力增加に對應するためであることは勿論であるが、そのためにのみ坑内婦人勞働は認許せらるべきではないと思ふ。何となれば、今私の觀た炭山の婦人の勞働は、婦人の有する最惡の條件の勞働であるから婦人の坑内勞働を許容することは、他のあらゆる勞働に對して、婦人の就業を許容する前提となる。私は今日（當時）それほどまでに日本の勞力不足が深刻で、打開し難いものとは思はれない。まだ他に幾つかの正に爲さるべき出炭力增加の方策がある。採炭方法の機械化の促進、勞働移動の全面的對策の强行、勞働組織の適正化等は出炭力增大の對策としては、先づ最も緊急を要する事項である。これらの事項は、資材の不足、勞力の不足の理由のために、極めて等閑に附せられてゐる。私はこれらの對策が眞に誠意を以つて、全面的に努力されなければ

ならぬと思ふ。かかる基本的な方法をとらないで、勞力を補ふために直ちに婦人勞力を坑内勞働に召集することになつたのである。このゆき方は、技術水準を高める努力を後廻しにして、勞力を增大する行き方である。增産は勞力を增大しないで、技術水準を高めてこれを實現してこそ、意味がある。難道をさけて、易行についたそしりを甘んじて受けなくてはならない。

炭山の勞働にさへ、婦人の勞働を許容したのであるから、他のいかなる危險な苦痛の重勞働にも、婦人を使用してこいではないかと云ふやうな前例となつてはならないと思ふ。

かかる意味での前例となる事を極力回避するため、且つは坑内作業組織の特殊性（先山、後山制度）に鑑み、坑内作業に婦人の使用を許容することは、出炭力の增加といふ國家的要請に奮ひ立つて勤勞する、彼女の夫たる坑夫の任務を補佐するための、妻の勤勞として許容せらるべきであると私は主張するのである。

從つて彼女の勤勞は賃銀のためにするのではなく、國家的要請に奮ひ立つ彼女の夫の勞働を補佐せんとする、妻の勤勞奉仕として確認せられねばならぬと云ふのである。

從つて彼女の勤勞に對しては、原則として賃銀は支拂はるべきではない。勤勞する妻をもつ夫には、彼の二人分の賃銀が支拂はれ、彼女の勤勞は純然たる夫への奉仕、索いては國家的要請に立ち上る妻の奉公の仕事として確認せられるべきである。

坑内の作業狀況は、上述するやうに、極めて原始的である。從つて風紀の上からも、彼女の仕事場に嚴正なる規正が設けられねばならない。卽ち出征中の夫をもつ妻の坑内勞働は禁止さるべきであり、遺家族としての婦人も亦入坑が許容されてはならない。

また坑内に働らく婦人は必ず有夫の婦人たることを原則とし、夫婦共稼、同

一切羽に勞働することが嚴守せられねばならない。

三番手（午後十一時より翌朝の七時まで）の作業には婦人として就業せしめないことは勿論であるが、この期間は夫たる坑夫の就勞をも禁止し、一番手又は二番手に轉換せしめることも考へてよい。

かくの如き三番手休業制をとるならば、勞力不足對策として、婦人の入坑を許容するといふ意味がなくなるではないかと云ふ議論が起る。併し私はこれに對してかう答へる。卽ち、今日の多くの炭山に於ける男子たる坑夫の出役歩合は、概して七〇％内外である。有夫にして、子女をもつ婦人の入坑歩合は男子のそれよりも低く、多分六〇％位ではないかと推定される。男子は一ヶ月にせいぜい二十日出役するから、女子の場合は十六七日の出役に止まるのではないであらうか。

炭山に於けるかくの如き低い出役歩合は、多分に勞働條件の劣惡なるに因る

のである。勞働が苦しいのである。休まねばならぬのである。健康體力が休養を欲するに因るのであらう。かかる高率なる休業率をもつ炭山で、特に女子の入坑を認める場合には、進んで一ヶ月の間に、一回又は二一回巡つて來る彼女の夫の深夜作業期の五日又は六日間を晝業に轉換せしめ、夜の休眠を充分にとることを可能ならしめると同時に、女子に對しては全然これを公休期間たらしめて此の期間に於て、彼女の就勞期間に於て停滯したる家事を處理し、よくこれを整へしめ、また子女をしてその母に充分親しましめ、かくして彼女をして子女の哺育の任務を補はしめる必要がある。これは同時に、次いで來る就勞期の出役を高め、その作業能力を一層に發揚せしめるに、大いに役立つと思ふからである。從つて男子に對しても、女子に對しても、決して出役歩合を更に一層低下するやうな、おそれはないと私は信じてゐるのである。

坑内作業は婦人にとつては相當な重勞働である。從つて入坑する婦人の健康

診斷と體格檢査とは、一層に嚴重に實施せられねばならぬ。體力强健な婦人のみに入坑が許容せられねばならぬ。また結核、肋膜炎等の既往症を有するもの、下腹部の疾病を有する婦人は絶對に入坑が拒否せられねばならない。婦人は男子に比して一般に抵抗力が弱く、結核への羅患性が大であるからである。從つて婦人の入坑の資格判定に際しては、胸部レントゲン檢査を强制し、嚴重なる科學的檢索を以つてこれに臨む必要がある。

また若し有夫の女子にのみ入坑が認容せられることになると、一家の家事、殊にその榮養の仕事に支障が起る。特に坑内に勤勞する婦人の子女の榮養には危險が迫つて來る。ここに於て家庭に殘されたる子女に對して、榮養供給の仕事が始められねばならない。また就學する兒童に對しては、學校給食が實施される必要がある。

これらの事情は當然に保育所又は幼稚園の設立を不可避ならしめるものである。而も保育所又は幼稚園の經營並びに管理は、これを營利的事業場に委ねて、安堵してはゐられない。國家的要請に立ち上り、その夫を補佐して勤勞する婦人の本來の母性的任務を擁護することは、正に國家の手によつてなさるべき事項であると思ふ。炭山の經營者をして、その坑内で働らく婦人の母性の擁護の責任を自覺せしめるとともに、この事業並びに任務を完遂せしめるために、國家的な援助の手がさしのべられてよいのである。

また婦人の從事する坑内作業は、主として後山作業である。石炭を車に積み、これを運び、岩積みをなし、時としては支柱を運ぶ。これらの凡ては重筋的勞働の部類に屬する作業である。從つてかかる種類の勞働は往々にして死流産の原因となる。姙娠三ヶ月以後にある婦人の坑内作業は嚴禁せらるべきである。

この姙婦たる婦人の坑内就勞の嚴禁こそ、人口政策としての勞働政策の時局的な緊要の問題であると思ふ。

また出産後六ヶ月間は、婦人の坑内作業は禁ぜらるべきである。一人の乳兒の出生は、その母をして、その生活を一變せしめるものである。母たることが彼女の生活の中心となるのである。彼女には單に主婦たる生活に加へて、幼なき生命を保育する任務が一時に加重して來るのである。考へ方によつては、戰時下ですらも、石炭を掘ることよりも、一人の幼き生命を守り育てることが、もつと重要なる國家的任務であるとも云へるのである。出産したる母の日常生活は頓みに繁忙を加へる。この繁忙の中にこそ、よき母は、よき健康なる乳兒を育くむことが出來るのである。乳兒をもつ母に、少くとも、出産後六ヶ月間の保育に專らなる日月が與へられなくてはならない。これこそ戰時對策の重點の一つである。凡ての作業場の勤勞を遠ざけて、彼女は、增加したる家事に對

處し、乳兒の保育に專念せしめられねばならない。これによつてのみ乳兒の生命と、その發育を擁護し、母性の任務を完遂することによつて、戰時の母性の任務をよく全うし得るのである。

尙、坑內に作業する婦人に對しては、その作業條件は改善せられなくてはならない。卽ち、彼女に對しては、男子よりも輕いシャベルを用意し、その勞働を輕減し、その作業速度を低下し、出來得べくんば、彼女の賃銀は彼女の出來高によらず、彼女の夫に彼の平均收入の二倍を支給する方法がとられることが望ましい。

また休息所を坑內の要所に設け、婦人の休憩所を男子と別個に設けることも必要なことである。坑內夫に對する榮養の配給を實施し、その榮養を補給し、よく調理せられた滋味に富むうまい食事によつて、勞務者の心をはげまし、こ

れをなぐさめることも大切なことであると思ふ。

坑內に勞働する婦人をもつ各炭山は、婦人の健康を擁護し、その母性を護り、その子女と家庭とに對して、常に援護の手をさしのべなくてはならない。國家はまた、それに對して周到なる用意をもつて臨まなくてはならない。かくして若し婦人の坑內勞働の許容を通じて炭山の經營者が、その地域に新たなる文化を創り、新しい生活の習俗を創りあげることが出來るならば、坑內の婦人勞働が、いかに苦痛と矛盾とに滿ちてゐるとしても、吾々はそれを超えて炭山の生活に一道の光明を認めることが出來ると思ふ。

戰時の沖仲仕

一

私は最近、沖仲仕の仕事をしてゐる青年にいざなはれるままに、芝浦の東京港の勞働狀態を觀に行つたのである。私を案内して引き出した青年といふのは柳澤君と云つて、信州農村出の青年である。開墾資金を得る目的で東京に出で、芝浦の仲仕として日々働いて來たのである。夜は暇があるので協調會の夜學に來てゐるのである。勞働しつつ、學修に志してゐるのである。いつかは立ち上がらうとする志を内に藏してゐるさまが、一見して私に感ぜられる。いかにも農村の青年と云ふ感じであるが、紺の洋服を着こんでゐるので、多分どこかの

會社の勞務の人だと思つてゐると、講義の合ひ間に、面會を求めに來た彼は、私に向つて、突如として、芝浦の仲仕の話をするのである。併し十五分の休みの時間がすんで、私はまた一時間半ばかりの勞働科學の話をしたのである。九時に講義が終ると、柳澤はまた私の室に來たのである。先程のつづきの芝浦の仲仕の話をする。きいてゐると、とても具體的な生き生きとした話である。私は大いに興味をひかれた。

柳澤君が協調會の社會政策學院の聽講生として來て、講義に出た唯一の目的は、東畑教授の農業政策の話をきゝ、彼をまつてゐる信州の農村での農民として彼の生活のためによい教養を積んでおかうといふためであるらしい。東畑教授に柳澤君が面會して、よくその教をきいたかどうかを私はききのがしたのであるが、東畑教授の講義が仲介となつて、私と柳澤君とがゆくりなく知合ひになつたのである。私は最近の機會に芝浦の仲仕の仕事場に柳澤君をたづねて行

くことを約束したのである。

船があり、貨物があり、はしけがあつても、軍需の物資は動かないのである。かかる物や物資がいくらあつても、それらの物資は、ただそれだけでは軍需にならぬのである。それに人間の力が働らき、人力が加はつて、始めて軍需になるのである。沖仲仕の仕事は、船と物資とをして、眞に軍需たらしめる大切な仕事なのである。

沖仲仕の仕事を、私は非常に大切な仕事だと考へたのである。戰地へ送る物資を、滯りなく、且つ極めて迅速に、安全に、荷積をする勞働は、軍の行動には極めて重大な役割をもつ勞働なのである。沖仲仕の諸君は、この大切な勞働を分擔してゐるのである。戰地に於ける兵站部の仕事の、も一つ下積みの仕事が沖仲仕の仕事である。多分芝浦は、昔の言葉で云へば、人馬絡驛と云ふ風景を呈してゐるのであらう。私はここに軍需勞働としての仲仕の仕事の重大性を

思つたのである。またそれが最も下積みの、而も大切な仕事であるが故に、何とかして、沖仲仕の仕事が、常に健全に順調に、且つ長期戰にたへるものであつてほしいと考へたのである。そしてこの最も下積みの仕事に從ふ仲仕諸君に幸多かれと祈つたのである。私が芝浦見學を志したのは、かかる念願に發したのである。

戰時下の物資の動きを分擔してゐる仲仕勞働の現實を觀ることは、私の心を引き立たしめたのである。炭山の採炭夫は工業の最前線の勞働だと云ふので重大視され、軍需工業の勞働は、直接的な軍需品の製造の擔當者として注視されてゐるが、沖仲仕の仕事は、戰時下では人々の注意の片隅にもおかれてゐない見逃されたる勞働である。それを觀、それについてとくと考へておかうと思ひ立つたのである。

二

勞働生理學を擔當してゐる所員と、社會學の方面を擔當してゐる所員の二人を同行として、ある日の朝、芝浦に急いだのである。芝浦に近づくと、東京の港に澤山の汽船が見えて來る。トラクターが織るが如くに走つてゐる。港の圏内に入るとさすがにあはただしい光景である。飲食店が軒をならべてゐる。その間に介在して、中村組、原田組などと云ふ看板のかかつてゐる事務所風の家がある。それらの家々に、印肸天や勞働洋服の人達がしきり出入りしてゐるのが見える。

柳澤君と打ち合せてあつた家の前に待つてると、ひよつくり彼が姿をそこに見せたのである。「ようこそ」とも何とも云はない。彼はおそろしくぶつきら棒である。彼は某組と書いてある家へ入つたが、仲々出て來ない。私はづかづかと、彼の入つた家へ入つて行く。二坪位の事務所だ。中に事務所員らしい人が二人ほどゐる。ここが荷役の指揮所であり、本部の一つである。壁に名札が

一面にかかつてゐる。某組所屬の登錄勞働者の名前である。約五六十名が七組ほどに區分されてゐる。その一組一組は何々部屋と名づけられてゐる。各組には各々統率者があるのである。

沖仲仕の勞働組織は約十名からなる小隊が單位になつてゐるらしい。何某組にはかかる小隊が數組あるわけである。各小隊の隊長は即ち部屋の頭である。その頭は勞働の指揮者であり、統率者である。集團作業組織が形成されてゐるのである。

家の外へ出る。まだ柳澤君は何事か談判してゐるらしい。家の外には五六十名の仲仕が、かしこ、ここに集團をなして、棒立ちになつてゐる。私は彼等と話してみたくなつた。私は彼等の最も澤山に集つてゐる方角へ歩みよつた。一人の仲仕をつかまへて、

「おい君、ここで何をしてゐるんだい」

「仕事をまつてゐるんだよ」
「いつからかうしてゐるんだい」
「朝の五時からだ」
「そりや又どうしたことだ」
「風が吹くから、船が後れるのだよ」
「どこから、かよつて來るんだい」
「代々木の山谷からだ、山谷から五時半に來るのは相當つらいよ」
「電車でくるのかい」
「電車などまだ通つてゐないや、歩いて來るんだよ」
「どうだい、一ヶ月に廿日位は働くかね」
「まあ、そんなところだ」
「一日平均二貫になるかい」

「もつとなるね」
「それぢや三貫かい」
「そんなところだ。女房子供があると樂ぢやないよ」
「賃銀はよくなつたろ」
「賃銀は上らないや、去年と同じだよ、それに物價は昂つてゐるから困るんだ」
「こんなにして、船が入るまでぼつねんとして待つてゐるのは、つまらないぢやないか」
「仕事がないから仕樣がないや」
「何かこの時間を有効に使ふ方法はないのかね」
「ないね、いつ船が入るかわからないぢやないか」
「辨當は家からもつて來るのかい」